テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

ゼニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

【Ｎコード】
Ｎ０８３０Ｙ

【作者名】
ゼニア

【あらすじ】
銀髪オッドアイで尚且つチート能力を強制的に持たされて転生させられた元一般人の物語。

※この小説は神様転生、チート、オリ主の要素が出て来ます。
苦手な方は回れ右をして回れ左をしてください。

プロローグ

「……ん？」

何もなく、見渡す限り真っ白な空間で一人の男が目を覚ます。

「あれ？　ここどこだ？」

男はキョロキョロと当たりを見回していると

「ふむ、ようやく気がついたか……」

そんな言葉と共に白いローブを着た老人が現れた。

……ｓｉｄｅ：謎の男

「あんた誰だよ？」

俺は突然現れた老人に問いかける。

これ夢なのかなぁ……

「ワシは最高神じゃ」

ん？西光　進？

「ああ、全国水平社宣言の」

「それは西光　万吉じゃ、ワシは最高神じゃ、言わば全ての神の頂点に立っとる者じゃな」

目の前の老人はそんな事を言う。

「くっ、可哀想に……この爺ちゃん、ボケちゃってるのね……！」

「いや、ボケとらんし、人を見た目と言動で判断すんなし」

何だ、正気なのか

「え？　てことはつまりガチなの？」

「うん、そう、ガチもガチ、大ガチじゃよ」

そんな馬鹿な……！

「な、ななななな何で神様がいらっしゃるんでごぜいやすでゲスか！？」

「落ち着け、驚き過ぎて言葉が変じゃ」

ま、まぁまぁ、と、取り敢えず落ち着こう。

すーはー、すーはー。

よし。

「落ちついたな？
では話そう、お主がここにいる理由などをな」

ーーーーーーーーーーーーー
神様説明中・・・
ーーーーーーーーーーーーー
「つまり俺は死んだ、と」

「うむ、そうじゃ、下級神が誤ってお主を殺しての、偶々ワシが下界を覗いていたから良かったものの、お主を殺した下級神はバレていないと思ったのか、誤って殺した事を隠蔽しようとしておったからの」

ひでぇ、神様が殺しを隠蔽とか……

「じゃからその神には電気アンマ８時間の刑にしておいた」

「地味に辛い」

「ちなみにその下級神、女神ね」

らめぇぇぇぇ！？

「正直その女神を見に行きたいが、我慢して、結局俺はどうなるの？」

「こちらのミスじゃからな、お主には転生してもらうぞい」

おおっ！？　来た、転生！

「異論は無さそうじゃな、では今からワシが言う条件と世界をどれか一つ選んでくれ」

1．子供魔法先生がいる世界へ行く、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

2．ゾンビで溢れかえった世界の日本に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

3．女性しか乗れない兵器がある世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

4．何の不思議な事もない世界、かと思いきや悪の秘密結社とかいる世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力

5．本気で何もない平凡な世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ。

「はっはっはっ、おいおいおいおい」

銀髪オッドアイてチート能力て。

「どこのテンプレチートオリ主だよ！？」

「気にいらんの？」

「気にいらんわ！？
せめて銀髪オッドアイは止めて！？」

銀髪オッドアイとかいや過ぎるわ！

「残念じゃが無理じゃ」
何で！？

「こんなテンプレチートオリ主になるならこのまま死んだ方がいいよ！」
「どうしても嫌なのかの？」

「やだよ！！」

断固拒否する！

「しかたないの……」

諦めてくれたのかな？

「なら、無理矢理じゃぁぁぁぁぁ！！！！」

じいさんがそう叫んだ瞬間、足下に穴が開き、落ちた、俺が。

「まさかの強制いいいいいい！？
こんのクソジジイいいいい～～～……」

第1話　転生

どうも、皆さん。

俺の名前は『如月（きさらぎ）　煉夜（れんや）』

え？　誰って？

プロローグにいた謎の男だよ。

あのクソジジイに強制的に転生させられて、七年ほど立っています。

キングクリムゾンだが、赤ん坊時代の事を話してもしょうがないしね。

それはそうと、あの駄神ガチで銀髪オッドアイに転生させてくれやがりました。

信じられないだろ？　日本人なんだぜ……俺。

ちなみに転生直後の回想……

ーーーーーーーーーーーー

『無事転生出来たみたいじゃの』

『おい、クソジジイ！
ふざけんなよ！？』

銀髪オッドアイなんかにしやがって！
どうせ銀髪オッドアイならラグナに憑依転生とかしたかったわ！

『あれあれ？　最高神のワシにそんな事いっていいのかの？　くだすよ？　天罰』

『やれるものならやってみろよ』

『運がよかったの、ＭＰが足りないみたいじゃ』

『死ねよ』

ギャグってんじゃねぇよ……

『まぁまぁ、そう怒るな、転生してしまったモノは仕方ないじゃろ』

アンタが強制的に転生させたんじゃねぇか

『四の五の言うでない、では今からお主の能力を教えよう』

えらく唐突だな。

しかし能力か……まぁチート能力なんだろうね。

『お主の能力は以下の通りじゃ』

1. 界王拳
2. サイヤ人並みの気
3. ＳＳＳ級魔力
4. ニコポ
5. ナデポ

『あ。あと、お主がおる世界はリリカルでマジカルな魔法少女の世界じゃからな』

『おかしいだろ！？
何だよ、界王拳って！？
公式チート能力持ってくんなよ！？
それにサイヤ人並みの気ってどの位だよ！？
いや、それ以前にニコポとナデポはいらねぇ！』

『ほっほっほ、安心せい、界王拳は今のお主でも5倍まで耐えれるからの』

『そういう事を言ってんじゃ……』

『じゃ、そういう事で』

そういい、じいさんの言葉は途切れた。

『え、ちょ……
マジで？』

――――――――
回想終了。

正直、ＳＳＳ級魔力だけでよかった……

そして、ニコポとナデポは本当にいらない……

てかあまりにも能力が濃かったからスルーだったが、リリカルなのはの世界ってのもおかしいよね。

確かさ、あのじいさんが選べって言ってた世界ってさ

１はネギま

２はおそらく学園黙示録

３はインフィニット・ストラトス

４は秘密結社とか言ってたから仮面ライダーとかかな

５は普通の世界

……リリカルなのはは選択肢になかったじゃん……

適当すぎだろ、じいさん……

まぁ、もう半ば諦めてるけど。

あれだな唯一の救いは俺の両親が銀髪オッドアイっていう明かに異常な俺を気味悪がったりせずにちゃんと育ててくれてる事だな。

ありがとう、母さん、父さん。

そして、ニコポとかふざけた能力のせいで笑えなくてすんません。

……

さて、能力の事だが。

まず界王拳、赤ん坊の時から5倍とか出来る時点で薄々気づいてたけど、成長に連れてさらに倍に出来るようになった。

現在8倍まで出来るようだ。

これ、悟空みたいな修行したらどうなるんだろうね。

次にサイヤ人並みの気ってのはどうやら、悟空とかベジータ並みの気を持ってるようだ。

しかし、サイヤ人じゃないから気を１００％フルには使えないみたい。

いや、正直クリリン、いやヤムチャ並みの気でもかなりチートだけどね？

夢のかめはめ波が撃てるのかな……

次にＳＳＳ級魔力、これがある意味普通。

よくある感じのチート能力だよね

取り敢えずデバイスとか無いわけだから使い方がよく分からんがリンカーコアがあるのは感じられた。

んで最後はニコポ、ナデポと……

何でこんなハーレム作るぜ！みたいな最低系の能力なんだろ。

ニコポのせいで俺、アレだよ？　無口無表情で何時も隅っこで本呼

んでる長門さんみたいポジションになってるんだよ？

唐突なアクシデントで笑いそうになった時とかマジ困る、必死で顔隠さんとヤバいからな……

一回ニコポを偶々いた猫さんにやってみた事があるんだが、凄いなつかれた。

どんなに引き離そうとついてくるから、界王拳使って逃げたのに俺の事追いかけて来たからな。

お陰で今は我が家の家族です。

ナデポは言わずもがな、ニコポが猫に対してではあるが威力が絶大だったからナデポとか出来ねえ、てか初対面の人を撫でようとかしたら変態だよ。

この二つの能力は正直どうにかせんとヤバい。

将来的にもしも子供が出来たりしたら、俺自分の子供に笑いかけたり撫でたり出来ねぇじゃん……

親に本気で惚れる子供とか薄い本だけでいいよ。

しかも厄介なのが男に対しても効果あるってのがダメだよなぁ……

何とかしないと、ウホッな展開に……

止めよう……
想像したら気分が……

ま、まぁまぁ、うん、とにかく、こんな感じで俺の第二の人生が始まったのでした。

主人公紹介

【如月（きさらぎ）　煉夜（れんや）】

神様に強制的に銀髪オッドアイのテンプレチートオリ主にさせられた元一般人。

鏡をみるたびに毎回ｏｒｚ←こうなる。

だがかなりのイケメンではある。

最近、名前もオリ主っぽい気がするんだけど……と更にネガティブっている。

能力は界王拳、馬鹿みたいに高い気、今から数年後のなのはさん並みの魔力、ニコポ、ナデポ。

界王拳は最初から使える。

気は練習中、しかし、界王拳が使えるためにすぐに扱えるかもしれない。

魔力は扱い方が分からない、正直気だけでもいいんじゃね？と思っている。

ニコポのせいで社交性皆無の男の子になってしまった。

しかも、銀髪オッドアイというのもあってか友達がいない。

しかし、内心でははっちゃけ倒したくて仕方がない。

人がいる前で笑えない分、家の自室で思う存分笑っている。

能力を完全に使いこなせるように頑張っているが、ニコポのせいで原作に介入するかどうか悩んでいる。

「これも全てニコポって奴の仕業なんだ」

「なんだって、それは本当かい？」

第2話　なのはちゃんはいい子だねぇ

やぁ、みんな、如月だよ

目と目が逢う～♪

ごめん、何でもない。

只今俺は

「ねぇねぇ、如月くん、なに読んでるの？」

原作キャラに絡まれてます。

あ、ちなみに今学校ね。

因果的な何かがあるのか俺は私立聖祥大附属小学校に入学した。

そう、今俺に絡んでる原作キャラとは、『高町なのは』

主人公だった。

何故かは分からないが、入学してから段々孤立して誰も俺に話しかけて来なくなったのに、なのはさんだけが度々俺に話しかけてくるのです。

何故だ。

ニコリともしたことないからニコポの呪いを受けた訳じゃないはずなのに……

「あっち行け」

俺はなのはさんに冷たく言う。

その言葉でなのはさんは悲しそうな顔をする。

ごめんねぇぇぇぇ！！！！

こんな事言って本当マジごめんねぇぇぇ！！！

でも孤立した俺に話しかけてくれる優しさに顔がニヤけそうになるからぁぁぁ！！

正直ニコポってどういう笑い方でポッてなるのかわからんからニヤリとも出来ねぇんだよ！

「ちょっとあんた！　なのはがせっかく話しかけてるのに何でそんな事言うのよ！」

『アリサ・バニングス』さん怒鳴りながら登場。

アリサさんの怒りはごもっともです、俺も俺自身に怒鳴りつけたい、いやむしろあのジジイを怒鳴りつけたい。

「だ、ダメだよアリサちゃん、私は気にしてないから、ね？　行こ！」

と、なのはさんはアリサさんの腕を引きながら行ってしまいました。

「ちょ、なのは！？　まだ話が……」

ごめんなさい、心の中で土下座します。

いやむしろ土下寝します。

ダメだと言うならヤムチャ寝します。

爆発してから。

……

「ちょっとなのは、どうして止めるのよ！」

アリサがなのはに問う。

「アリサちゃん、落ち着いて」

怒っているアリサを『月村　すずか』がなだめる。

「大丈夫よ、すずか、私は常に落ち着いてるわ」

アリサの言葉に「そうかなぁ……？」と疑問に思うすずかだが口には出さない。

「ていうか、なのははどうしてアイツに構うの？　ほとんど喋らないし、何時も無表情で本読んでるし、はっきり言って根暗よ？」

ズバッと言うアリサ、本人が聞いていたら心の中で泣いてそうだ。

「……如月くんはね、何時も寂しそうな目をしてるの」

なのはが喋り出す。

「男の子達が漫画やアニメの話をしてる時に話に加わりたそうにしているし、お弁当食べてる時も誰かと一緒に食べたそうにしているの」

――その時の煉夜。――

【少年達の話】

（うおおおお！　あの少年達、ドラゴンボールの話してるじゃねぇかよ！

この世界にもドラゴンボールあるのかよ！？

やべぇ、話に加わりてぇ……！
ネタバレしてぇ……！）
【昼食】
（寂しい。
俺以外みんな、グループ作ってんのに俺だけポツリと……
くっ、給食だったら強制班になるのに……
まぁ、班になっても俺に話かけてくる奴はいないだろうけど……
やべぇ、目から汁が出そうだ）

――――――――――――

「それで、お友達になりたいな、って」
「話はわかったけど、あんたよく見てるわね
まさかアイツの事……」
「にゃっ！？　ち、違うよ～！」
アリサの妙な勘違いに手をパタパタと振り否定するなのは。
「まぁ、取り敢えずそういう事なら私達も手伝うわ、ねっ、すずか」
「うん、私達も頑張る」
「二人ともありがとう！」

……

「っ！？　……何か俺の知らない所で変なことになってそうな気配が……！

なるほど、コレが気を感じると言うことか」

※違います。

第3話　……あるぇ？（前書き）

次の話からキングクリムゾンしてると思います。

第3話　……あるぇ？

「如月くん、一緒にお弁当食べよ！」

「屋上に行くから来なさい！」

「みんなで食べた方が美味しいよ」

上から、なのはさん、アリサさん、すずかさん。

あるぇー？　何でこんな事になってんの？

何で昨日より好感度上がってんの？

まさか、昨日、界王拳の練習で調子に乗って9倍にしたからこんな事に……？

いや、絶対ないわ。

てか筋肉痛半端ないッス。

補正的なものがあるからこの程度ですんでるんだよね。

何かごめんね、悟空。

それはそうと、この状況だよね。

正直嬉しいけど

「一人で食べるからいい」

一緒に弁当何て食ったら幸せ過ぎてニヤけちまうよ……

「そんな事言わないで行こ！　ね？」

なのはさんがずいっと顔を近づけてくる。

らめぇぇぇ！　そんな期待の籠もった目でみないで！

「い、いいってるだろ……

お、俺は一人で食べるから……」

……〔屋上〕

「いただきまーす♪」

嬉しそうにお弁当を食べ始めるなのはさん。

どうしてこうなった？

今日のなのはさん何時も以上に食い下がって来て、それでも断った俺に業を煮やしたのか、アリサさんに首根っこ掴まれて屋上に強制的に連れてこられました。

何か強制ってのに縁があるのかな、俺。

「全く、アンタのせいで、時間ギリギリになるじゃない」

「まぁまぁ、アリサちゃん」

……さぁて、ここまで来ちまった以上、もう逃げられないぜ？

俺が。

本気出して、無表情にならねばならん……

だけど、嬉しくて、自然と笑みが出そうだよおっかさん……！

「どうしたの？　如月くん。

変な顔して……」

はっ！？　なのはさんに見られた！

ニヤけそうな顔を必死に隠して無表情にしようとしてる顔がっ！

ニヤけと無表情の中間みたいな顔って凄い変だよね。

「い、いや、何でもない」

こうなれば、弁当を食うことに集中して、周りを気にかけない事にしよう。

「ねぇねぇ、如月くん」

「……」（パクパク）

「如月くん？」

「……」（むしゃむしゃ）

「あぅ……」

ドゴッ！

「うぶっ！？」

「無視してんじゃないわよ！」

な、なんだ！？　何が起こった！？

弁当に集中してたら横腹に衝撃が走った……

周りを見ると、ちょっと涙目ななのはさんと毛が逆立ちそうな勢いでキレてるアリサさん、そしてアリサさんをなだめるすずかさん。

……なんか俺が思い描く事と全く違う事が起こりすぎじゃね？

「やっぱり、迷惑だったかな……
如月くん」

不安げな表情で聞いてくるなのはさん。

ここは、迷惑だと言った方が俺に関わらなくなるんじゃなかろうか……

ニコポと言う厄介な物を何とかせんと危険だもんなぁ……

やはり、ここは……

「め、迷惑」

「っ！？」

「じゃない」

あれ？

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『迷惑で止めようと思ったら「じゃない」をつけてしまっていた……』

何を言っているかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわかない……

頭がどうにかなりそうだった……

もっとも恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ……

いや、さ。

あんな泣きそう顔見て、冷たく言い放つ事なんて出来なかった……

――ちなみに。――

【頭がどうにかなりそうだった】

アリサの殺されそうなくらいの鋭い眼光を向けられて。

【もっとも恐ろしいモノの片鱗】

すずかの黒い笑み。

――――――――――

「ほんと？」

「ほ、本当」

ヤバい、ヤバい。

なのはさんの涙目上目使いが可愛いすぎて世界がヤバい。

「じゃあ、お友達になってくれる？」

「うん、なる」

……。

あ、ありのまま今起こった事を（ｒｙ

なのはさんは魔性の女だったようです。

なのはさんの言う事は何でも聞いて上げたくなってしまう……！

友達承認しちまったよ！？

「本当！？」

パァッと表情が明るくなるなのはさん。

ふ、ふふ……

負けたよ……

きっとコレから無表情を貫き通してストレスがたまる生活が開始さ

れるのだろう……

それでもいいかなって自分がいて怖い。

第４話　瞬間移動

なのはさん達と友達になってから結構月日が立ちました。

俺、三年生。

原作開始まで秒読みだねっ！

そして、誰でもいいから俺をほめて！

今なお、無表情を貫き通している、俺をほめて！！

いやぁ、友達になった日から頻繁に四人でつるんでるだけどさ、そろそろ限界。

何時も無表情な俺を笑わそうって変な企画が出てきた時はもうゴールしてもいいよね、みたいな感じだった。

俺に忍耐力が結構あった事に驚きですよ。

あ、ちなみに界王拳が１０倍まで耐えられるようになった。

成長するだけで倍数が増えるって……

何か本当ごめん、悟空。

キーンコーンカーンコーン♪

おっと、学校終了のチャイムがなったな。

さて、じゃ、帰

「レンヤ君、一緒に帰ろ！」

ろうとしたらなのはさんに捕まったでござる。

ちなみになのはさんは結構前から俺の事を『如月くん』から『レンヤくん』に呼び方がグレードアップしています

そして、なのはさんの後ろにはアリサさんとすずかさんという何時ものメンバー

しかし、今日は

「用事があるから一緒に帰れない」

ので一人で下校します。

「あ、そうなんだ」

ごめんね、なのはさん。

来るべき原作開始に備えて、修行するよ。

……
と、言うわけで来ました。

人気の無さそうな山に。

とりあえず、アレだ、原作開始に備えて、なのはさんの砲撃に対抗できる攻撃を編み出そう。

まぁ、対抗するといってもなのはさんと敵対するわけじゃないけど。

ていうか、あの砲撃に対抗するにはピッタリの技あるよね。

かめはめ波だよね。

オリジナリティなくてごめんなちい

ぶっちゃけるとここ数年、気の練習してこれは誰の気かっていうのは分かるようになったりはしたんだけど、気の放出をした事はないんだよね。

まぁ、とにかく一度やってみる。

「よし……
か、め、は、め」
「波っ！！」
ポヒュウ……
「何か出た」
スッゴいシケてたけど、かめはめ波できたな……
うん、取り敢えず出来たって事は気の放出の仕方を色々ためせば、
かめはめ波出せるはず！
「かめはめ、波っ！」
ボゥ！
「か～め～は～め～、波ぁ！」
ドォン！
「かぁぁぁめぇぇぇ（若本風に）」
バチッバチバチ……！

「はぁぁぁめぇぇぇ（若本風に）」

ビリビリビリビリ……

「ぶるぁぁぁぁ！！」

ズドォォォォ！！！！

「どういうことなの」

漫画みたいにしっかりしたかめはめ波が出たけど何で若本風で一番ちゃんとしたのが出たんだ……？

「普通に出せるようにならんと、セルのかめはめ波みたいになってしまいそうだ……」

さて、と。

逃げよう。

空に撃ったとは言え光の柱が昇って行ったのを見た人が来るかもしれないし。

よし、ここは瞬間移動で……

「……」

ピッ

額に人差し指と中指を当てる。

悟空の瞬間移動ポーズだな。

「コレは母さんの気だな……」

ピシュン！

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

「って出来たらいいのにねぇ」

瞬間移動は流石にまだ無理だぜ。

というか母さんは俺がこんな事出来るのを知らないから、母さんの所に瞬間移動とかしないわ

さて、ふざけてないで移動しようか……

第5話　原作開始

《助けて》

！？

これは……

ユーノくんとうとう来たか……

「今、何か聞こえなかった？」

なのはさんが言う。

ちなみに今日は一緒に下校中でした。

「何か？」

すずかさんが首を傾げる。

「何か声みたいな……」

「別に……」

「『さようなら、天さん、どうか死なないで』くらいしか……」

「それ、聞こえたの！？」

「ていうか、あんたが冗談言ったの初めて聞いたんだけど……」

そういや、いつも冗談とかネタは心の中で言ってたんだった……

《助けて！》

「！！　やっぱり聞こえる！」

そう言ってなのはさんは駆けていきました。

とうとう、原作開始かぁ……

どうしよう、俺、舞空術昨日覚えたばっかり何だけど……

いや、別にいいか。

なのはさんを追いかけてフェレットっぽい、生き物を発見。

「怪我してる……」

「取り敢えず獣医さんに見せよう」

「う、うん！」

…………………………

で、結局ユーノくんの怪我はそんなに大した事もなく、獣医さんに預けてみんな家に帰りました、と。

今日の夜かなのはさんが魔法少女になるのは……

んー、まぁ、うん。

取り敢えず、再びユーノくんの声が聞こえるまで寝てようかな……

ーーーーーーーーー《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

再び、声が響く。

「昼間の声と同じ声……」
なのはが声に反応する。

《聞いてください
僕の声が聞こえるあなた、お願いです！
僕に少しだけ力を貸してください！》

「あの子が喋ってるの？」

そして、なのはは昼間助けたフェレットの下へと行くのだった。

【その頃の如月くん】

《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

「うぅん……ブルータス、お前もか……ムニャムニャ」

見事に夢の中だった。

しかも変な夢を見ている。

《聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願いです！

僕に少しだけ力を貸してください！》

「ん……オラに、元、気を……分けて、くれぇ……」

今度は元気玉を作っているのだろうか。

そして、そのまま朝を迎えるのだった。

ーーーーーーーーーーーー

チュン、チュンチュン！

「小鳥のさえずりが朝だと知らせる……」

ふぅ……

普通に寝過ごしたぜ☆

まぁ、いいか。
何とかなるでしょ。

取り敢えず、学校へ行こうか。

……

学校へ行くと、なのはさんがフェレットを飼うことにしたという話を聞いた。

なのはさんは無事、魔法少女リリカルなのはにランクアップしたようです。

授業中はなのはさんきっとユーノくんと念話で話てるんだろうなぁ、とか思いながら、1日は過ぎていきました。

・・・
・・・・・
・・・・・・・。

で。

「それを渡して下さい！」

こうなると。

どうして、こうなったんだろう……

えーと、確か……

学校が終わって、いつものようにもはや当たり前のような感じで皆と下校して、家に帰り、ブルータス（ニコポ被害にあった猫、メス　1話参照）が外でニャーニャー言ってるから何かと思って見てみたら

くわえてた。

何をって？

宝石種。

通称ジュエルＳＥＥＤ。

何か違う気がするがまぁいいだろう。

いや、ビビったね、ブルータス（猫）がまさかジュエルシードくわえてるとかね。

慌てて取り上げたよ

ジュエルシードが発動しちまったらヤバいからね

まぁ、ブルータスは願いが無いのか知らんが発動しなくて良かった。

んで、もし発動してもいかんから急いでこの間、かめはめ波の練習をした山に来た。

そしたらね、みんな大好き『フェイト・テスタロッサ』さんが現れました。

アルフさんを連れて。

正直ジュエルシードはフラグかもと思ったんだが、ガチだった。

どうしよう……

初めて会う魔法少女がフェイトさんとか想定外だった……

第6話　なんかよく分からない内に初戦闘（前書き）

私「如月くんのオッドアイって何色と何色なの？」

煉夜「ん？　緑色と紫色

紫色とか……ラムダでもいるんじゃねぇのって感じだよね……」

第6話　なんかよく分からない内に初戦闘

「これは危険な物だぞ？　分かっているのか？」

フェイトさんに言ってみる。

「……」

「いいから渡しな！」

フェイトさんにだんまり決め込まれました。

お兄さん泣きそう。

あ、同い年か。

アルフさんがグルルルと唸ります。

はっきり言って怖いです。

これを危険な物とか言わなければ一般人として接してくれてたかもしれないね、失敗した（・ω＞）

「た……」

「？」

「タッカラプト・ポッポルンガ・プピリット・パロ！！」

「は？　あんた、何言って……」

俺も一体何を言っているのk

ビリビリビリビリ！！

「な！？」

いきなり俺が持っていたジュエルシードが発光しながら震えだす。

何だ？何だ！？

俺は慌ててジュエルシードを放り投げる。

ピシャン！！　ゴロゴロゴロ……

何かいきなり空が暗くなって雷とか鳴り出したんだが。

バシュゥゥゥゥ！！

そして、ジュエルシードから光が昇り……

《私を呼ぶ者は誰だ……？》

何か出てきた。

「な、なんだいコレは！？
あ、あんた何したのさ！？」

「ジュエルシードは実はナメック星のドラゴンボールだったって新たな説が生まれたな」

慌てるアルフさんに言う俺。

まさか、ナメックの合い言葉でジュエルシードからポルンガ出てくるとか完全に予想外だわ、しかも一個だけで出て来るとかドラゴンボール涙目。

まぁ、ポルンガに似てるの顔だけだがな。

動体とか龍ってか竜だし。

足あるし。

そして、俺はテンパり過ぎて逆に冷静になってるし。

ヤバい、俺の余計な一言でどんどん混沌になっていく……！

《さぁ、願いを言え》

え、願い叶えてくれるの！？

「ね、願い？」

フェイトさんが放心した感じで言う。

そうだよね、いきなりこんなん出て来たら誰でも驚くよね。

だが、願いを叶えてくれるなら好都合だ。

今こそ俺の願いを……！

「俺のニコポ、ナデポをどうにかしてくれ！」

本当に願いが叶うなら俺は外で存分に笑える！

《それが願いか……

いいだろう、叶えてやろう……ただし》

ん？　ただし？

《私を倒す事が出来たらな！！》

「どういうことだぜ」

……

よく分からない内に戦闘が開始し、１０分くらいたちました。

《ちょこまかと！！》

ポルンガ（仮）の口から火球が放たれます。

「界王拳３倍！！」

それを界王拳の倍率を上げてかわします。

実はさっきからこんな感じで逃げ回ってます。

え？　だらしねぇな？

はっはっはっ、よく考えてくれよ、確かに界王拳とか気とか扱えるけどさ、これまで普通の小学生だったんだぜ？

そんな奴が戦闘訓練とかすっ飛ばしていきなり実戦出来ると思う？

まぁ、そんな事言って逃げ回るだけでは何も始まらないから、覚悟決めようか。

あ、ちなみにフェイトさん達は放心してるフェイトさんをアルフさんが人型にトランスフォームして抱えてどっかいきました。

丸投げとか。

《ぬん！》

ポルンガ（仮）は尻尾を振るい、俺に迫る。

「４倍！！」

それを確実に物理法則を無視した動きでかわし、ポルンガ（仮）の背後に回る。

界王拳って色々凄いよね。

「くらえ！　完全に界王拳頼りの蹴り！！　８倍！！」

《ぬっ！？　グオオオオ！？》

ズドォォォォン……！！

いやぁ、スッゴい吹っ飛んで行ったよ。

界王拳スゲェ。

《おのれ、こしゃくな！》

あれで決まるとは思ってはないけど、そこまでダメージはなかったっぽい。

ならばアレで決める！！

俺は両手を右腹辺りに持って行き気を溜める。

「か、め、は、め……」

俺の構えを見て、ポルンガ（仮）が身構える。

「波っ！！　とでも思ったか！！」

かめはめ波を撃たずにポルンガ（仮）の眼前へとかっ飛び拳を振りかぶる。

《ふははは！！　飛んで火にいる夏の虫だ！！》

ポルンガ（仮）は俺めがけ火球を放つ。

俺は迫り来る火球にぶち当たった……りはせず、火球は俺をすり抜けどこかに飛んで行った

《何！？》

「残像だ」

ポルンガ（仮）の真横に現れ

「波ぁぁぁ！！」

先ほど溜めたいた、かめはめ波を放った。

……

うーん。

能力チートだけかと思ったら、思いの他ボディもチートだったたっぽ

い、残像拳出来るとかマジ胸熱。

《よくもやってくれたな……》

さて、このポルンガ（仮）はどうしようかな……

8倍界王拳かめはめ波は大分効いたみたいで地面に倒れてるんだが……

「勝った……よな？
本当に願いを叶えてくれるのか？」

《ああ……
私に勝ったのだ、願いは叶えてやろう》

マジか、マジなのか……！

「じゃ、じゃぁ、さっきも言ったように、俺のニコポとナデポをどうにかしてくれ！！」

《……》

わくわく

《……》

ドキドキ

《……ム》

な、何だ？

もう願い叶った？

《残念だがその願いは神の力を大きく超えている。
叶える事は不可能だ》

「なん……だと？」

そん、な……

ば、バカな……

はっ！？　そうか……
このニコポ、ナデポを与えてくれやがったあのじいさん……

最高神って言ってたよな……

つまり、このポルンガ（仮）の言っている神が下級神だろうが中級神だろうが上級神だろうが、そのさらに上を行く最高神の力を超えない限りジュエルシードで願いは叶わないって事？

くそぉ……半端に頂点立やがって……

何が最高だよ再婚しろコラぁぁぁぁ！！

ふぅ、ちょっと落ちつこうか……

《別の願いにするか？》

「保留って出来る？
他の願いが決まった時にまた喚びたいんだが」

《いいだろう……
では、さらばだ！》

そう言って、ポルンガ（仮）は光を発し、収まった時には封印状態になったジュエルシードに戻っていた。

残念だが……
まぁ、何とかなるさ！
うん、多分！！

最近、無表情にもちょっと慣れてきてるしね！

大丈夫、大丈ｂ

ガサガサっ！！

ふおう！？

な、何だ？

動物ｋ

「レンヤ、くん……？」

「な、なのは……さん？」

なのはさん登場ぉぉぉ！？

え、まさか見られてた？

い、いやそんな事は……

「ごめんね、レンヤくん
ずっと見てたの……

さっきの……何？」

＼（＾ｏ＾）／

界王拳（その他諸々）バレた！

第7話　オハナシ（前書き）

例えばさ、もう自分（如月くん）の事を好きな子にはニコポ、ナデポは効きませんみたいなのはどうだろう。

第7話　オハナシ

―数分前―

ゴロゴロゴロゴロ……！！

「ふぇぇ！？　な、なになに！？　何でいきなり暗く……！
も、もしかして……」

「なのは！　ジュエルシードだ！！」

いきなり暗くなった空に驚くなのはにユーノが叫ぶ。

「や、やっぱり！！
行かなきゃ！」

なのははジュエルシードの下へと走りだしたのだった。

……

「すぐそこだよ、なのは！」

『～～～～！！』

『～～～～！！』

ジュエルシードに近づくにつれ、物音や喋り声が聞こえてくる。

「誰かいる……？」

なのはは走るのを止め、ゆっくりと近付き物音の方を見る。

《ぬん！！》

『4倍！！』

そこにいたのは、どこかで見たような顔をしている大きな竜と戦っている、なのはのよく知る友達だった。

「う、嘘、レンヤ、くん？」

「あ、あの子は一体……
なのはの知り合いなの？」

ユーノが驚きながらなのはに聞く。

「う、うん、赤いオーラ？　みたいなの出てるけど、レンヤくんだよ、私の大切なお友達」

なのはが答える。

ちなみに赤いオーラというのは界王拳を発動したら出るアレである。

『くらえ！　完全に界王拳頼りの蹴り！！　8倍！！』

《ぬっ！？　グオオオオ！？》
煉夜の蹴りで竜が吹き飛んで行く。
それを見たなのはは
「界……王拳……？
今、界王拳って言った！？」
目を丸くしながら驚き
そして煉夜が右腹辺りに両手を持って行き、あのポーズを決めた時
「嘘、あれって……」
『か、め、は、め……』
「……」（ドキドキ）
かめはめ波を期待するなのは。
『波っ！！　とでも思ったか！！』
だが煉夜は撃たずに竜の眼前へと飛ぶ。

「や、やっぱり、そうだよね……」
流石に撃てないか、とちょっとガッカリするなのは。
《何！？》
『残像だ』
『波ぁぁぁ！！』
「ざ、残像拳なの！？　かめはめ波なのー！？」
立て続けに驚愕するなのは。
それにしても女の子なのに技をよく知っているものである。
「あ、あれは、魔法？
い、いや、魔力じゃない……
な、何だアレ？」
※気です。
ーーーと、言うようになのはは結構前から見ていたのだった。
ーーーーーーーーーーーー
「つまり、カクカクシカジカシカクイムーブって訳なんだ」
俺はなのはさんにポルンガ（仮）が現れたいきさつを話した。

「え、えっと、それより何でドラゴンボールの技が使えるのか知りたいの」

それより！？　それよりっつったよ！？

ジュエルシードェ……

さて、どうしたものか……

「え、えっと、界王拳自体は生まれた頃から使えてたんだ、かめはめ波とかは、しゅ、修行？　そう修行」

修行らしい修行なんかせずに習得しちゃったけど。

「……」

「な、なのはさん？」

え、だんまり？

こ、怖い、凄く怖い！

まさかＯＨＡＮＡＳＩフラグ？

「す」

す？

「すごい！　すごいよ！」

え？

何が？

「界王拳やかめはめ波が使える何てすごいの！！」

そうか……

そうだよね、全く知らない技とかならまだしも、この世界ドラゴンボール存在するもんな、かめはめ波とか使えたらある意味英雄みたいな感じかもしれない。

ていうか、目をキラキラさせてるなのはさん可愛い。

「生まれた頃から使えるって……

レアスキル……なのかな……？」

足下で呟くユーノくん

そう言えばいたんだった。

身体能力やら何やらを耐えれる限り倍々に出来るレアスキルとか管理局に目つけられたりしないよな？

俺、界王拳を１００倍まで上げる事が出来たらハンドレットパワーにするんだ。

「あ、そういえば」
なのはさんが思い出したようにいう
何でしょう？

「ニコポとナデポってなに？」

そ　れ　か　！！

や、ヤヴェ……

どう説明すれば……

「え、えと……
く、癖？　そう！！　癖だよ！！」

「クセ？」

小首を傾げるなのはさん

「そう、癖だよ、困った癖でね、はっh！！」

「？　いきなり後ろ向いてどうしたの？」

あっぶねぇ！！

ノリで笑う所だった……！

セーフ！　ギリギリセーフ！！

「大丈夫だ、何でもない」

「そう？」

さて、うん。

どうしようかな。

第8話　瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？（前書き）

この小説、日間ランキングで一位になりまスター

初めて一位になったよ。

さて、今回はあんま進展ないです

如月くんが移動術覚えるくらい。

第8話　瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？

ピッ

俺は額に人差し指と中指を当てる、悟空の瞬間移動ポーズだ。

「うーん、なのはさんの戦闘力は……3くらい？」

別に瞬間移動しようとした訳じゃなく、ただ気を探ってみただけだったりする。

「ひ、低い……！」

ガーンとショックを受けるなのはさん

「いやいや、なのはさん、悟空とかを基準に考えてるかもしれないけど、よく考えるんだ、ラディッツが初めて会った地球人のおっちゃんがいただろ？
あの大人であるおっちゃんでさえ戦闘力が5だったんだ、3も十分だと思うよ」

まぁ、スカウターがないから、俺の勘だけどね

しかし赤ん坊の悟空の戦闘力が2ってことは赤ん坊にしちゃめっち

ゃ強いって事だよな。

というか、何故俺がなのはさんの戦闘力を測っているのかと言うとあの能力バレした日から数日がたち、俺となのはさんとユーノくんは一緒にジュエルシード集めをしているんだが……

ふと、なのはさんが「私の戦闘力って幾つくらいなんだろう」って呟いたため、こんな状況になっていたと。

「なのはさんは気よりも魔力の方がデカいし、魔導師戦で戦闘力はそんなに関係ないと思う」

「そっかー」

ていうか、結構前から思ってたが、この海鳴市って何か気がデカい奴何人かいるんだが

その内二人がなのはさんの家にいるんだよな

完璧にあの人達だよね。

今思ったが、フェイトさんの気を探ればどこにいるかわかるよね

「レンヤくん、レンヤくん」

「ん？」

なのはさんが何か期待したような眼差しで俺を見る。

え、なに？

「瞬間移動はできないの？」

……くっ！

ごめんよ、なのはさん……

流石に瞬間移動は……

しかし、わくわくした表情をしているなのはさんを見ると、出来るんじゃねって力が湧いてくるね。

「ちょ、ちょっと待ってて」

「あ、うん」

俺はなのはさんからは見えない位置まで移動する。

「さて……」

再び額に指を当て、なのはさんの気を特定する。

別に額に指を当てなくても気は探れるんだが、何か格好いいし。

「瞬間移動、瞬間移動……」

俺は今なのはさんの喜ぶ顔がみたいがために瞬間移動を覚えようとしている……

なんだろう、なんか複雑な気持ち。

まぁいいや、集中集中……

正直どうやるか分からないけど……

頼むぞ、俺のチートボディ！

むむむむ……！

なのはさんの気と俺の気を合わせるかのように……

なのはさんの気を手繰り寄せるかのように……！！

跳べ！

跳べよぉぉぉぉぉ！！

ピシュン！！

「え？　わっ！！　レンヤくん！？」

「……出来た？」

なんか、某鳳凰院みたいなテンションになったら出来た。

「もしかして、今のが瞬間移動！？
すごーい！！」

「て、転移？」

なのはさんがはしゃぎ、ユーノくんが驚く。

ユーノくんいたんだね

「なのはさんのためにたった今瞬間移動を覚えたよ」

流石チートボディ。

度々言ってるけど、悟空、本当にごめん。

「え？　私の、ため？」

「い、いや、何でもない」

「そ、そう」

なのはさんの顔がちょっと赤い。

ヤバい、何か主人公みたいな事してしまった……！

しかし、コレで瞬間移動かめはめ波が出来るようになったのかな。

ヤバいな、どんどん魔力の必要性がなくなっていく。

てか魔力より気の方が効率いいんじゃないかと思えてきた。

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！（前書き）

アンケート的な何かを取りたいと思います。

感想で魔力ＳＳＳもいらないって意見があったので。

?:魔力をＳＳＳじゃなく、ＤかＣくらいに落として、新たなチートがなすりつけられる。

?:そのままでいい。

よろしくお願いします

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！

皆さん、どうも、如月です。

今日はすずかさんの家に招待されたので来ています。

しかし、アレだ。

ハッキリ言って、女の子3人の中に男である俺がいる時点で結構気まずいのに、女の子の家に行く勇気なんぞ持ち合わせておりません。

なのに来ている理由は

止まってました。

何がって？

リムジン。

俺の家の前に。

わけがわからないよ、と疑問に思っていると、中からアリサさんが現れ

「あんたの事だからまた妙な理由つけて来そうにないから迎えに来てあげたわ！」

って、胸張って言われてしまい、断れなかった。

そういう訳で月村邸にお邪魔させて貰った訳だが

「どういう事なの」

「「「ニャーニャー！」」」

何かまとわり付かれてるんだが……

「これはまぁ、なんというか……」

「うちのネコ達みんな……」

「レンヤくんに引っ付いてるの」

何故？

にこりともしてなければ撫でてもないぞ！？

まさか、俺は実は猫に好かれ安いのだろうか……

まぁ、すずかさんの家の猫が人になれてるってのもあるんだろうが……

「そんなに懐かれてるんだから、撫でてあげなさいよ」

懐かれてるってかじゃれつかれてるって感じもしないでもない。

しかし

「俺が撫でたらすずかさんちの猫はみんな俺の虜になってしまうぞ？」

「何言ってんのよバカ」

ひどい！

「最近、煉夜くん、よく冗談を言うようになったよね」

すずかさんが言う。

実は冗談じゃないんですよ……

さて、どうしたものか

と、考えだした瞬間

「フニャァァァァ！！」

「「「ニャッ！？」」」

一匹猫が飛び込んで来て、俺にまとわりついていた猫を追っ払う。

こ、この猫は！？

「あれ？　この子うちのネコじゃないよ？」

「どこかから紛れ込んできたのかしら？」

「ブルータス（猫）！　ブルータスじゃないか！」

「「「え？」」」

何故こんな所に……

「ニャーン♪」

俺に飛び付いてくるブルータス

「お前、何でここにいるんだ？」

「ニャンニャン、ニャニャン、ニャーン！！」

「暇だったから追い掛けて来た？

家からここまで結構距離あるのによく来れたな」

「ニャン！」

「か、会話してる」

なのはさん達が驚いているが別に会話してる訳ではない。

ただそれっぽい事を言ってるんじゃね？っていう俺の勝手な解釈である。

でもブルータスを見てるとあながち間違いではないような気がする。

……

さて

「正直、俺はここにいてはいけないような気がしてならないんだが」

俺にはガールズトークなんてぶっ潰してやろうぜ！！　みたいな勇気はないよ。

「気にすんな」

「アリサさん……
そんな男前な事を……」

そんなキャラだったっけ？

でもまぁ、紅茶は美味しいし、お菓子も美味しいし、悪くはないよね。

猫撫でたいのに撫でれないのが残念だが

そんな感じで、三人の話聞いて、時折相槌をうったりしてのほほんと過ごしていた。

が。

「！？」

なのはさんが驚いたように目を大きく開く。

《なのは！》

《うん、すぐ近くだ》

ユーノくんとなのはさんが念話で話しだす。
そうだったな、ジュエルシードが近くにあるんだっけ。
《どうする？》
ユーノくんがなのはさんに問う。
《え、と……
えーと……！》
なのはさんはアリサさんとすずかさんを見て悩む。
《そうだ！！》
「ユーノくん？」
ユーノくんがなのはさんの膝から飛び下り駆けていく。
「あらら？　ユーノどうかしたの？」
「うん、何か見つけたのかも、ちょっと探してくるね」
「一緒に行こうか？」
すずかさんが聞くが

「大丈夫、すぐ戻ってくるから待っててね」
なのはさんはそういって走って行く。

《なのはさん、二人は俺に任せて》

《！！　う、うん、ありがとう！
念話出来たんだね》

散々念話を聞いてたからなんか感覚的に出来たよ。

「ユーノくんはなのはさんに任せて、俺達はドラゴンボール談議でもしようか」

「なんでよ」

「あはは、ごめんね、私よく知らないんだ」

「それはいけない、今度全４２巻を貸そうか？」

「やめい！」

アリサさんに止められました。

さて、そういえばなのはさんとフェイトさんが初めて遭遇するんだったっけ？

なのはさんとフェイトさんの戦いには下手に首突っ込まないほうがいいだろうな。

アルフさんとは戦うけどね。

第１０話　湯煙温泉……ポロリもあｒねーよ（前書き）

アンケート結果。

？になりましたー

（∀ｰ）

第１０話　湯煙温泉……ポロリもあｒねーよ

あの後、なのはさんはフェイトさんと無事遭遇したみたい。

アリサさん達と話をしながら気を探ってて遭遇したのは分かってたけど、アルフさんの気がなかったなぁ……

原作もこの時アルフさんいなかったんだっけ？

正直９年も原作を見ていないと、殆ど忘れてしまうんだが。

転生系の二次創作ってオリ主はずっと原作覚えてたりするけど、凄い記憶力だ。

もしかすると、記憶チートなのかもしれない。

まぁ、それはそうと、しばらくして、フェイトさんの気が離れて行き、なのはさんの気が少し弱々しくなったため、アリサさんとすずかさんにはなんやかんや言って、迎えに言ってみると、地面に倒れているなのはさんを発見。

急いで連れて帰りました。

そして、その日からなのはさんはフェイトさんの事で悩みだした。

……

と、言う訳で、温泉に来ました。

なのはさんに誘われたんですよね

「お父さんとお兄ちゃんが是非おいでって」

……さて、界王拳の限界を超えようかな。

２０倍かなぁ、いや、３０倍……

だがしかし、現実逃避しても意味がなかった。

「こうなれば後は野となれ山となれ」

まずはみんな温泉に入るようだ。

女子率高いよな、本当。

《レンヤ！　助けてー！》

ん？　ユーノくんから念話が来た。

ユーノくんの方を見ると、女湯に連れて行かれてました。

……うらやましい。

だが、助けを求めているならば答えようか。

「なのはさん」

「ん？　なーに？」

「ユーノくんプリーズ」

手のひらを差し出し言う。

「ダメよ、ユーノは私達と入るのよ！」

アリサさんに遮られました。

「ユーノくんは男だぞ？　ここは俺達と男湯だろう？」

「ユーノは動物じゃない」

「ですよねー」

《えぇ！？》

ごめん、ユーノくん。

強く生きて。

《レンヤ！？　レンヤぁぁぁぁぁ……！》

連れてかれました。

「さて、煉夜くん
俺達も入ろか」

ポンと俺の肩に手を置き言う、士郎さん

そして、その後ろには恭也さん。

詰んだ。
ーーーーーーーーーーーー
カポーン。

ふう、いい湯だ。

さて、上がるか。

「どこに行くんだい？　煉夜くん、しっかり温まらないと」
ダメでした。
引き止められたので、再び湯船につかる。
「さて、煉夜くん、ちょっと聞きたい事があるんだけどね？」
士郎さんが言う。
「最近、なのはが……」
ガクブル
「キミの事をよく話すようになったんだが、どうしてかな？」
！？
ば、バカな……！
士郎さんの気が膨れ上がった、だと？
「それに、最近キミとなのはは一緒にいる事が多いが……
何をしているんだ？」
！！？
そんなバカな……
恭也さんの気も膨れ上がった……

二人の気がどんどん上がっていく……！

お、俺の界王拳１０倍でも勝てるかどうか……

「あ、あぁ……」

気分はベジータ

も、もうダメだ、おしましだぁ……

ブクブクブクブク……

「ん？　れ、煉夜くん？」

「た、大変だ、のぼせて気を失ってる！」

ベジータの気持ちがよく分かりました。

第１１話　寝過ごしはダメだよね（前書き）

さぁて、壁にぶち当たったぞ……

英語のテストが１０点未満を貫いて卒業した私にデバイスの台詞は難しすぎるぜ……！

まぁ、普通に会話する分には日本語でいいよね。
ちなみにピシュンと言う効果音は瞬間移動した音ですのでよろしく。

第１１話　寝過ごしはダメだよね

……ん？

あれ、ここは……

……ああ、そうか！

高町親子の戦闘力にあてられて気を失ったんだった

ハハッ、すげぇ真っ暗

……もう、夜じゃん。

温泉の思い出が恐怖で震えた事ってどういう事だよ。

そして、どうして俺は気絶から睡眠に移行してたんだよ！

確かここにもジュエルシードあったよな？

そして、フェイトさんも来るんだよな？

完全に寝過ごしてる気がしないでもないが……

ちょ、ちょっとなのはさんの気を探ってみよう

……ん？

旅館の外にいるな、しかもフェイトさんの気もある。

もしかして、バトル中？

ちょっと行ってみるか。

ピシュン！

ーーーーーーーーーーー

場面が変わり、なのはＶＳフェイト。

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、ディバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合い、拮抗する。

「レイジングハート、お願い！」

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

レイジングハートはなのはの言葉に応え、ディバインバスターの出力を増加させる。

その結果、なのはのディバインバスターがフェイトのサンダースマッシャーにうち勝った。

「！」

「なのは……強い！」

ユーノが感嘆する。

「でも、甘いね」

そんなユーノにアルフが言う。

《Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ》

「なのは！！」

ユーノが叫ぶ。

「！？」

なのはが上を見上げると、バルディッシュをサイズフォームにしたフェイトが接近していた。

ーーーーーーーーーーーー
ピシュン！
瞬間移動でやって来ると、上空でフェイトさんがなのはさんの首もとにサイズフォームのバルディッシュを突きつけた状態で止まっていた。

も、もう決着ついてるな……
これは正直、下手に動けない。
「レンヤ！」
背後からユーノくんの声。
「ユーノくん、すまない、大分遅れたようだ」
「ちっ、新手……ってあんたはあの時のボウズ！！」
アルフさんが驚いている。
神龍騒動ですね。
「！　レイジングハート！　何を……！？」
なのはさんの方を見てみるとレイジングハートがジュエルシードをフェイトさんに差し出している所だった。

「主人思いのいい子だね」
フェイトさんはそう言い、ジュエルシードを手に入れ、地上に降りて来る。
「帰ろう、アルフ」
「さっすがアタシのご主人様♪
じゃぁね、おチビちゃん！」
アルフさんが狼から人に変わり、フェイトさんと歩いて行く。
「待って！」
だが、なのはさんが歩き去っていくフェイトさんを止める。
「名前……
あなたの名前は？」
「フェイト……フェイト・テスタロッサ」
フェイトさんはなのはさんの問いに答え
「私は……！」
なのはさんの言葉を最後まで聞かず、飛び去って行った。

「……」

なのはさんはフェイトさんが去って行った方を静かに見つめていた。

「なのはさん、フェイトさんとはきっとまた近い内に会うことになる。

元気だして」

「……うん、ありがとう、レンヤくん」

さて、もし士郎さん達がなのはさんがいないのに気付いたら俺がわりとマジでヤバいので、そろそろ帰ろうか。

「旅館に帰ろう。

瞬間移動するから俺に掴まって」

「……うん」

――――――――

【以下、オマケと言うかボツ】

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、ディバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合う、と思った瞬間。

ピシュン！

サンダースマッシャーとディバインバスターの射線上に煉夜が現れた。

「え？」

「！？」

「えぇぇぇ！？」

上から煉夜、フェイト、なのは。

チュドーン！！

「うぼあぁぁぁぁ！！」

「レンヤくーーーん！？」

※ちょっとふざけ過ぎたのでボツりました。

第12話　豆……？

「ニャーニャー」

ガリガリガリガリ

朝、ブルータスの鳴き声と何か削ってる音で目が覚めると。

枕元に……

「何だこれ」

何かあった。

「箱……？　ブルータス、何これ？」

「ニャー？」

さぁ？　って感じに首を傾げる、ブルータス。

ふむん、えーとなになに？

箱を手に取り、箱に書かれた文字を読む。

「×豆作りセット？」

って書いているが……

何豆が分からん、豆の前に何か漢字があるんだが、ブルータスの爪痕で削れて読めねえ。

一体誰が置いたんだ？

誕生日って訳でもないし、両親からのプレゼントとかならクリスマス以外は直接渡してくるだろ？

取りあえず箱を開けてみると。

「種と、何か少し青みがかった液体」

セットって言うからいっぱい入ってんのかと思ったら二つだけって。

よし、ちょっと、植えてみようか。

ーーーーーーーーーーー

だがしかし、今日は学校だった。

学校から帰ってにしようか……

しかし、気になるんだが。

聞いてみるか……

「母さん」

「あら？　レンくん、どうしたの？」

初登場、俺の母親（２６歳）。

ちなみに父親はもう仕事に行ってる。

「今日学校休んでもいいかな」

「どうして？　具合悪い？」

「気になる事を追い求める年頃だからさ」

何言ってんだ、俺。

「……」

母さんがジッと俺を見つめる。

やっぱダメ？

「そう、そっか……

レンくんももうそんな年頃か……

うん、いいよ、学校にはお母さんが電話しとくね」

何か、成長した息子を見て、嬉しいような、どこか寂しいような、
そんな表情をして言う母さん。

何かノリいいな。

「え、てかズル休み、承認？」

「うん、でも今日だけだからね～」

ニコニコしながら言う母さん。

相変わらずのほほんとしてる人だな。

まぁ、うん。

じゃ、ちょっと庭に行って種を植えてみるかな。
ーーーーーーーーーーーー
とりあえず庭の隅の方に植えてみるかな。

「へへ、この土ならいい豆が育つぜ」

プスっと土に穴を開けて……

種を入れて、埋めて、謎の液体を垂らしてみる。
ポチャ、ポチャっと。

……。

ニョキ

！？

もう芽が出た！！

ニョキニョキニョキニョキ……

凄い勢いで成長してる……

ふむ、莢豌豆みたいなのが出来たぞ。

とりあえず収穫。

莢に入ってる豆を一粒取り出してみる。

何か、既に完成した大豆っぽい豆が出て来た。

……これって、まさか……？

いや、そんな馬鹿な。

……ちょっと、食べてみるか。

パクッと。

ドクン！！

「！？　うっ……」

な、何だ、力が湧いてくる……？

こ、これはやっぱり……

さ、さっきの箱！

箱を調べてみよう！

部屋に戻り、種と液体の入っていた箱を調べると。

「ん？　手紙？」

手に取り読んで見ると……

【久し振りじゃな、元気にしとるかの？
最近、最高神（笑）と言われて軽くへこんでる最高神じゃよ。
いやぁ、数年振りにお主の事を天界から覗いてみたんじゃが、ワシが与えた能力のせいで苦労しとるようじゃの。

そのお詫びと言ってはなんじゃが、お主に特製仙豆セットをやろう。
まぁ、お主に与えた能力があれば、仙豆なんぞ別に必要ないんじゃが、持っておいて損はないじゃろ。
それでは、コレからも頑張ってくれ】

じいさん……

こんなんよりニコポとナデポをどうにかしてくれよ！！

今でも十分チートなのに、仙豆って……
回復チートも追加された！！

数に限りがあるチートではあるが……

ううん……

……あ、仙豆でいい事を思いついたぞ。

俺の思惑通りになるかは分からんが……

やってみる価値はあるな。

第１３話　瞬間移動の便利さは異常

ピッ

額に指を当て気を探る。

誰の気を探っているかというと、プレシアさん

いや、仙豆を作りながらドラゴンボールの事を思い出してたら、悟空って、地球から界王星に瞬間移動したり、天界から界王神界に瞬間移動してたから、プレシアさんの気さえ見つかれば時の庭園に瞬間移動出来るんじゃね？って思って。

だから探してるんだけど……

プレシアさんの気を感じた事がないから分かんねぇ。

飛びきりデカい気とかなら分かるんだが、プレシアさんって気は多分大きくないよね？

うーん、フェイトさんに連れて行ってもらう……いや、ダメだな。

敵もしくは邪魔者って思われてそうだし……

うーん……

と、考えていると。

《レンヤくん？》

なのはさんから念話が来た。

ちょっとびっくりした。

《どうかしたの？　なのはさん》

《よかった、元気そうだね》

元気そう……？

ああ、そうか、今日学校休んだんだった。

《ズル休みだったからね》

《えぇ！？　ズル休みだったの！》

《いやぁ、仙豆作ってて》

《仙豆！？》

なのはさんが驚いている。

まぁ、ドラゴンボール知る方には仙豆ってとてつもない物って分かってるだろうしなぁ……

《レンヤくんって仙豆も作れるんだ……》

《うーん、まぁ、そういう事になるのかな？
数に限りはあるけど》

《す、スゴいね～
あ、そうだ、私とユーノくん、これからジュエルシードを探しに行くけど、レンヤくんはどうする？》

そうだな……

《今回は俺、別の場所を探してみるよ
あ、見つかったら呼んで》

《うん、わかった！》

よし、それじゃ行ってみようか。

……

……全然見つからない～♪

もう夜だぜ？

そりゃ、簡単には見つからないだろうけど。

あと、今日学校休んだから人が沢山いる所は探せないんだよな。

クラスメイトや先生に鉢合わせたら面倒くさいしね。

まぁ、なのはさん、アリサさん、すずかさん以外の人達には俺空気扱いだけどね。

それに美少女三人と一緒にいるから敵意の眼差しを受ける事もあります。

あれ、目から汗が……

しかしまぁ、相手は小学生だからね

あまり気にはしない。

ま、そんな事よりジュエルシードだな。

連絡もないし、なのはさんの方も見つからないのかな。

ふぅ、ジュエルシードにも気があればなぁ……

……あ。

そうだよ、ナメックの合い言葉を言いながら探したら見つかるんじゃないの？

い、いや、いかん、頭の可哀想な子に見られてしまう……

というかそれ以前にそれで見つかったら毎回神龍と戦わなきゃいけないじゃないか……

どうしたものか……

ピシャーン！！

ゴロゴロゴロゴロ……

おぉ！？

雷！？

まだ、合い言葉は言ってないのにポルンガ（仮）出てきたのか！？

……って、違うようだ。

何だ？　街の方に雷雲が……

まさか……！

ピシュン！！

……シュッ！

「レンヤくん！」

「なのはさん、これってもしかしなくても」

瞬間移動でなのはさんの近くに来ると、ジュエルシードの光が空へと昇ってました。

「うん、あの子もいるみたい」

《なのは！　ジュエルシードをあの子達よりも先に封印して！》

ユーノくんの声が頭に響く。

《うん、わかった！》

なのはさんのレイジングハートに光が集まりジュエルシードに放とうとする。

が、それよりも一瞬早く遠くのフェイトさんのバルディッシュから黄色い光が放たれる。

「！！」

それを見てなのはさんが驚くが、すぐにレイジングハートからもジュエルシードへとピンクの光が放たれる。

距離的な問題もあって、二つの光はほぼ同時にジュエルシードに当たった。

「リリカル、マジカル！！
ジュエルシード、シリアル１９、封印！！」

その言葉と共に光が太くなり、ジュエルシードに当たる。

フェイトさんの方も同じように光が太くなっている。

二つの光がぶち当たり、何かスゴい無理矢理な感じがするけど、ジュエルシードは封印状態になり空中に留まっている。

「ま、まぁなんだ……
さっさと、取っちまおう！」

俺は空中に浮かぶジュエルシードに手を伸ばす、が。

「そうはさせるかい！！」

その言葉と共に狼状態のアルフさんが思いっきり口を開けてこっち

に飛びかかって来た。

「おわっ！！」

ドスン！！

構図、巨大な狼にのしかかられてる俺。

……。

「おわあああ！？　か、界王拳！！」

「なっ！？」

界王拳を発動し、飛び退く。

こ、怖ぇ……

狼状態のアルフさんって近くで見ると怖いんだよ！

「何だい？　今のは？」

アルフさんが聞いてくる。

「界王拳だ、詳しくはドラゴンボールを読め」

あえて何巻かは教えない。

そもそも教えた所で、見ないだろうしね。

さて、フェイトさんも来たな……

よし。

ピシュン！

「あ……！？」

「なっ、速い！？」

俺は瞬間移動でフェイトさんの目の前に現れる。

流石にフェイトさんも驚いたみたいだな。

だがその驚きを待っていた！

驚きで少し開いたフェイトさんの口に、持って来ていた仙豆を押し込む。

「んむ！？　う、んん！」

よしよし、ちょっと強引だが仙豆を飲ます事ができた。

「な、何を……！？」

フェイトさんが目を見開き、自分の手の平を見つめる。
「じゃあね」
身体の調子に驚くフェイトさんにそう言って、なのはさんの下へ戻る。

「ふぅ、仕事をやり遂げたって感じだ」
「れ、レンヤくん、何を飲ませたの？」
なのはさんが困惑したように聞いてくる。
「ん？　仙豆だよ」
「仙豆？」
きょとん、とするなのはさん。
いちいち可愛いな。
「うん、結構前から思ってたんだよね
フェイトさんの気って、常に弱々しいんだ。
栄養が取れてないというか、なんというか。
だから仙豆を食べさせた。
正直、何も言わずに決行したのには反省している」
「う、ううん、それはいいけど」
「今回のあのジュエルシードはなのはさんに任せるよ、フェイトさ

んと話したい事もあるんでしょ？」

「！　うん、分かった！
ありがとう、レンヤくん」

さて、俺はユーノくんと一緒に傍観する事にしよう。
アルフさんがこっちに攻撃してこない限り、だけど。

「あ、仙豆のせいで前よりパワーアップしてたらゴメンね」

「あ、あはは……」

流石のなのはさんもコレには苦笑い。

ーーーーーーーーーーーー

「フェイト！　大丈夫かい！？」

フェイトはアルフの言葉が耳に入っていないのか、手を握り締めたり、開いたりを繰り返している。

「フェイト？」

「力が、溢れてくるみたい……」

フェイトが呟く。

「え？」

「あの子が口に入れたモノを飲み込んだら、身体の疲れや痛みが全部なくなっちゃった……」

フェイトはなのはと話す、煉夜を見つめながら言う。

「ほ、本当かい？」

「うん」

「あ、アイツ、何でそんな事をしたんだろう」

「分かんない」

二人（一人と一匹？）は揃って首を傾げるのだった。

第１４話　時空管理局（前書き）

管理局登場なう。

第１４話　時空管理局

ズドォォォォン！！

うわぁ……

かめはめ波の比じゃねぇくらいデカい光の柱が空に昇った。

フェイトさんとなのはさんの戦闘は二人のデバイスがジュエルシードを間にかち合い、本気で壊れる５秒前というほどの罅が入り、そしてジュエルシードから凄まじい光が発せられた事により終了した。

フェイトさんの動きにキレがあったような気がしたがどうなんだろう。

仙豆が凄い効いたのかな？

しかし、なのはさんも大分強かった、やはり、戦闘民族と言われてるあの親の遺伝はあるのか、魔法を最近始めたばかりなのに成長のスピードが速すぎるぜ。

「なのは！」

ユーノくんがなのはさんの方へ駆けて行く。

フェイトさんはバルディッシュを待機状態に戻し、あろうことか、

発動しかけているジュエルシードを素手で掴んだ。

「フェイト！！」

「う……く……」

「フェイト！！　ダメだ！　危ない！！」

アルフさんが叫ぶ。

フェイトさんの手の中のジュエルシードは光を放ち、今にも発動しそうになるが

手袋が弾け飛んでも構わず、ジュエルシードを抑えつけ、フェイトさんはジュエルシードを封印した。

この世界の女の子達は俺なんかよりも心が強いです。

ジュエルシードを封印したフェイトさんは立ち上がるが足下がフラつき、倒れそうになる

「フェイト！」

しかし、それを人型になったアルフさんが受け止め、フェイトさんを抱きかかえる。

そして、そのまま飛び去って行った。

「あ……！」

なのはさんはただそれを見ているしか出来なかった。

ーーーーーーーーーーー

あの後、俺もなのはさんもそのまま家に帰りついた。

レイジングハートは自己修復機能で明日にはなおるようだ。

自己修復機能って、もはや地球の科学レベルを超えてるな。

それにしても、フェイトさんは手、大丈夫だろうか……

仙豆を渡しに行きたいが、そこまで空気を読めない訳じゃないからなぁ……

仕方ない、今日はもう寝よう……

お休み～

「ミー」

ブルータス、お前いつの間にベッドの中に……

……

チュンチュン……

もう朝かよ……

何か、眠れなかった。

なんというか、気分が高ぶっているというか、遠足前日みたいな……

とにかく眠れなかった……

頭ダル……

そして、目に入るは仙豆。

……。

……。

……。

カリッ

さて、今日も頑張ろうか。

・

・

・・・・・

おや？　ない……

探れど探れど、フェイトさんの気が見当たらない。

この街にいる筈なんだがな……

ああ！　そうか、フェイトさんは時の庭園に行ったのか？

今日行く日だったの？

しまった、知っていたら無理矢理にでもついて行くんだっｔ

そうだ……

今フェイトさんが時の庭園にいるって事はフェイトさんの気を見つける事が出来れば、瞬間移動で行けるんじゃないか？

早速、手当たり次第に探ってみよう……

ーーーーーーーーーーーー

結論から言うとだ。

ダメでした。

フェイトさんの気は見つからなかった。

くっ、折角母さんに無理言ってまた学校休ませて貰ったのに！

まぁ母さん自体はスゲェニコニコしてたが、それ程気にはしてないみたいね。

いつもニコニコしてる母。

いつも無表情な俺。

これアレだな、銀髪オッドアイってのもあって確実に親子に見られないだろうな……

ま、まぁそれはいいとして、フェイトさんだよ。

俺に悟空並みの気を探る力があれば時の庭園にいるフェイトさんを見つける事が出来るかもしれないが、今は無理だ。

時の庭園に一回でも入る事が出来ればなぁ

瞬間移動が可能かもしれん。

何このルーラ。

まぁ、今はそんな事を言っても仕方ない。

ずっと気を探るのに集中してたからなぁ……

気分転換に散歩にでも行く事にするか。

……

で

《オオオオオ……！！》

こうなると。

まさか散歩に出て公園に言ってみたらじんめんじゅみたいな樹の化物に襲われるっていうね。

ジュエルシードが見つかって運がいいのか、悪いのか。

《オオオオオ！！》

超怖ぇ☆

一応なのはさんに念話を送ったが……

来るまで何とかしないとね。

とりあえず適当に気弾を撃ってみる。

キンッ！

え？　鋼体？

い、いや、バリアか……

今までのとはひと味違う感じがするぞ

ジュエルシードもそろそろ本気出してきたようです。

《オオオオォォォォ！！》

じんめんじゅ（仮）から太い根が伸び、俺へと迫る。

「残念だったな！　舞空術だ！」

迫りくる根を空に飛んで避ける。

バキバキバキ！！

ドシュッ！！

……根が９０度くらい直角に曲がって空にいる俺に突っ込んで来てるんだが。

ハハッ、対空攻撃とか。

「さ、３倍！！」

界王拳を発動し、避ける。
避けたと安心しちゃダメって事がよく分かりました。
《オオオオォォォォ！！》
じんめんじゅ（仮）が叫び根の数が増え、さらに迫って来る。
とうとう、あれを使う時が来たようだな……
俺は手の平に気弾を作り出し、その気弾を薄ーく、鋭利に伸ばして行く。
「行くぞ、気円斬！！」
迫り来る根に向かい、投げつける。
ザンッ！！
見事に根が斬れた。
さすが気円斬。
クリリンの作った技の中でピカイチだな
「もういっちょ！　気円……連斬！！」

ビシュシュシュシュ！！

気円斬を両手で連続で繰り出す。

気円斬は迫る根を全て斬り刻んで行く。

《オオオオオオ……！？》

よし、怯んだ隙に！

「か、め、は、め……」

ピシュン！

「波ぁ！！」

わざわざ、瞬間移動でじんめんじゅ（仮）の背後に回りかめはめ波を放つ。

一回やって見たかったんだ。

《オオオオオオオオオオオ！！！！》

・・・

・・・・・

・・・・・・・。

……さて、何かなのはさん達が来る前に倒せちゃった訳だが。

ジュエルシードって強い力当てたら封印出来ちゃうのかな？

もう、封印状態になってるんだが。

ふーむ。

キラン☆

「ん？」

ズドン！

「うおあ！？」

何か飛んで来た！

ま、魔力弾か？

「ジュエルシードを渡して」

フェイトさん降臨。

《Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ》

バルディッシュ、サイズフォームの先端に形成された光刃が放たれる。

え、ちょ……！

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ガキン！

「大丈夫？　レンヤくん！」

なのはさんも降臨！

なのはさんがヒーローみたいな登場の仕方をしたんだけど。

マジかっけぇ。

「封時結界、展開！！」

ユーノくんが結界を展開する。

そういや、俺が単独で戦う時、結界とか貼れないから下手したらバレるな……

今まで一般の方にバレなかったのは運が良かったとしか言いようがないという。

「邪魔をしないで」

「私は、フェイトちゃんと話しがしたいだけなんだけどな」

フェイトさんとなのはさんが一触即発な状態になる。

「邪魔をするなら……」

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ》

フェイトさんがバルディッシュを構える。

「フェイトちゃん、もし私が勝ったら、お話、聞かせてくれるかな？」

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｍｏｄｅ》

なのはさんもレイジングハートを構える。

……どうしよう、いきなり過ぎてついて行けない。

二人が同時に飛び出し、打ち合う、かと思った瞬間。

ドシュゥゥゥ！！

空に魔法陣が浮かび上がり……

「ストップだ！！」

誰かいた。

「「！？」」

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

あれは……

そうか！

「時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ！

詳しい事情を聞かせて貰おうか」

クロノくん、クロノくんじゃないか！

顔を見れば男って分かるけど、声だけ聞いたら、あれ？　女の子？

って思うくらい、１４歳にしては幼いボイスをしているクロノじゃ

ないか！！

「何かけなされている気がする……」

主人公紹介2

【如月（きさらぎ）　煉夜（れんや）】

知っての通り主人公。

オッドアイであり、右目が緑、左目が紫である。

界王拳や気の使用は何も問題なく行えるが、ＳＳＳ級もの魔力を一度も使った事がない。

ＳＳＳという凄まじいものなのだが、気が便利すぎて本人すらその存在を忘れる事がある。

ずっと気だけを練習していたため、自分でも知らないうちにリンカーコアに気の膜を張っており魔力が微妙にか出せない状態になっている。

が、これを聞いても本人は別に気にしないだろうし、気の膜自体もすぐに取り外せるものである。

【如月くん所持品】

［仙豆］

言わずと知れた、超回復力を持つ豆。

そんなに美味しいわけではない。

もう数秒後に死んでしまうような傷を負ってしまったとしても一粒食べると一瞬で全快する。

傷を治す他にも疲労回復や１０日間何も食べなくてもいい程の栄養が取れる。

しかし、病気には効かない。

［ジュエルシード］

なんやかんやでちゃっかり所持している、願い保留ポルンガ（仮）がいるジュエルシード。

願いは考え中。

分かっているとは思うが、如月くんは基本的、無表情。

だがようは笑わなければ言い訳で驚き叫んでる時は驚いた表情をしているし、恐怖（主に高町親子の威圧）に染まる時は泣きそうな表情をしたりもする。

第１５話　アースラ（前書き）

書いてる途中で眠ってて、何かよく分からなくなった。

第15話　アースラ

「時空管理局？」

ユーノくんが呟く。

とうとう来たな。

正直今日来る事なんて忘れてた。

「まずは二人共武器を引くんだ。
このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノくんが降りて来る。

「！？」

ズドォォォン！！

「フェイト！　撤退するよ、離れて！！」

アルフさんがクロノくんに向かって魔力弾を発射する。

「……！！」

フェイトさんは着弾する魔力弾の爆風と共に飛び出し、アルフさん

と一緒に逃走する。

「待て！！」

クロノくんが逃げるフェイトさん達にデバイスを向け、魔力弾を放とうとする。

「何してんだ」

スパン！

「うあっ！？」

俺はクロノくんの頭をはたき、魔法の使用を止める。

「うわー、管理局員を叩くなんて度胸あるなぁ」

ユーノくんが言う。

え、まずかった！？

俺、捕まる！？

捕まっちゃう！？

「な、何をする！！」

「な、何をって、う、んん！！　ゴホン。

背後から傷だらけの女の子を狙っていたから止めただけだ」

フェイトさんの気が仙豆を無理矢理食べさせる前よりも弱々しくなってたんだよな。

手の怪我もあるだろうし、心配だ。

仙豆を渡したい。

「傷だらけ……？
フェイトちゃん、怪我してたの！？」

なのはさんが言う。

「うん、多分
大分参ってる筈なんだが、精神力が強いんだな」

いや、精神力というより、プレシアさんを悲しませたくないって思いが体を動かしているのかも知れない。

「フェイトちゃん……」

心配そうななのはさん。

「と、とにかく君が持っているロストロギアを渡すんだ」

と、クロノくん。

「ロストロギア……
ああ、コレか」

俺はジュエルシードを“一個”取り出しクロノくんに渡す。

そこで

『クロノ、お疲れ様』

空中に映像が映し出され、映っている女性がそう言う。

リンディさんじゃないか……

「すいません、片方は逃がしてしまいました」

俺の方をチラッと見ながら言うクロノくん。

さて、何のことやら。

『んー、ま、大丈夫よ

それでね、ちょっと話しを聞きたいから、そっちの子達をアースラに案内してあげてくれるかしら？』

「了解です、すぐに戻ります」

アースラか……

さて……

「帰るか」

ピッと額に指を置き、瞬間移動のポーズをとる。

「えぇ！？　帰っちゃうの！？」

すまない、俺にはリンディ茶を飲む勇気がないんだっ！！

「うぅ、一緒に行こうよ」

と、なのはさんが言う。

俺の服の袖をキュッと掴んで。

不安そうな表情で。

若干上目使いで。

「大丈夫だ、問題ない。
行こうか」

なのはさんは魔性の女だったようです。

いつの日か同じような事を言った気がする。

「なのは、僕もいるんだよ……」

すまない、ユーノくん、忘れていた。

ーーーーーーーーーーーー【アースラ内部】

とうとうやって来たぜ、アースラ。

宇宙戦艦みたいで格好いいな。

「なのはさん、探検しよう
フリーザ様がいるかも知れない」

「た、楽しそうだけど、今はやめよ？

あと、フリーザ様がいたら恐いよ……」

ホッホッホ！！　見てくださいザーボンさん、魔法少女ですよ！

いかん、思いの他テンションが……

落ち着け、俺。

「探検はさせないし、そんな妙な奴もここにはいない」

クロノくんがぶっきらぼうに言う。

いずれクロノくんもドラゴンボールの虜にしてやる。

・・・・・・

ユーノくんによる時空管理局の説明を聞きながらしばらく歩くと

「ああ、何時までもその格好というのも窮屈だろう、バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

とクロノくんがなのはさんに言う。

「あ、そっか、そうですね、それじゃあ……」

そう言いなのはさんはバリアジャケットを解除する。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

クロノくんがなのはさんの足下にいるユーノくんに言う。

……？

「ああ、そう言えば、そうですね
ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ああ、そうか、ユーノくんってフェレットじゃないんだった。

「？」

なのはさんが何を言っているのか分からないのか、きょとんとしている。

そして、ユーノくんが発光する。

ユーノくんは男の子になった。

「あ、ああ、ふ、ふえぇぇ！？」
なのはさんがすげぇ驚いている。
「？　なのは？」
「ゆ、ユーノくんて、ユーノくんて、あ、あのその、えぇぇぇ！？」
「なのはさん、少し落ち着こうか
深呼吸しよう」
「う、うん、すーはー、すーはー」
なのはさんがゆっくりと深呼吸をする。
「僕の本当の姿見せた事なかったっけ？」
「ねぇよ」
あれ？　と考えているユーノくん。
「正直、ユーノくんが人間だったとかは別にどうでもいいんだ、だが一つ聞きたい」
俺はユーノくんの肩に手を置き言う。
「何？　レンヤ」
不思議そうな顔をしているユーノくん

「温泉は楽しかったか？」

「！？」

俺の言葉にユーノくんはビクッとする。

「俺が士郎さんと恭也さんに挟まれてベジータってる時にユーノくん、君は男にとっての全て遠き理想郷（アヴァロン）でお楽しみだったと、そういうわけだな？」

「ぼ、僕は、みんなの裸は見ていない！！」

首を振りながらそう言うユーノくん。

「誓うか？」

「ち、誓うさ！」

そうか、見てないのか、よかったよかった。

「でもなのはさんの下着姿とかは何回も見てるよな？」

「！！　そ、そんな訳……」

「ユーノくんの気に乱れを感じる」

「ごめんなさい」

正直に謝ったのは誉めよう。

しかし

「羨ましい」

全く羨ましいなぁ！

「え？　レンヤくん、う、羨ましいって……？」

聞かれてた……

「な、何でもない、忘れて」

「う、うん」

だから、何故こんな主人公みたいな事を……！

「んん！　もう、いいか？」

クロノくんが咳払いをし、そう言う。

「君達の事情は知らないが、艦長を待たせているので出来れば早めに話しを聞きたいのだが」

「あ、はい」

「すみません」

「子供の内からそんな真面目だと、ハゲるぞ」

ピキッ！

クロノくんのこめかみに血管が浮き出る。

「き、君は……！」

プルプルと僅かに震えるクロノくん。

「あ、あわわ！

レンヤくん！　そんな事言っちゃ駄目だよ！　謝らなきゃ！」

「ごめんなさい」

「う、く……

ま、まぁいいだろう」

「なのはの言う事、素直に聞くなぁ……」

ーーーーーーーーーーーー

「艦長、来てもらいました」

艦内の一室に入ると

「おお……」

盆栽や鹿威しがある、外国人が日本にかぶれてテンションの赴くままにつくちゃったというような和風な部屋だった。

何回か日本に来た事があるんだろうか。

「お疲れ様、まぁ、三人共、どうぞどうぞ、楽にして」逆に楽に出来ない空間なんだけどね、ここ
・
・
・
・
・
「なるほど、そうですか
あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはアナタだったんですね」
リンディさんがユーノくんに言う。
「それで、僕が回収しようと」
「立派だわ」
「だけど、同時に無謀でもある」
「……」
しゅんとするユーノくん。
「あの、ロストロギアってなんなんですか？」
なのはさんが聞く。
ロストロギアって、ロストロ、ギア？　ロスト、ロギア？
「ああ、遺失世界の遺産……って言っても分からないわね

えっと」

と、リンディさんが親切にもロストロギアの説明をしてくれているので、出されたお茶を飲みながら聞く。

……普通に飲んじまったが、普通のお茶だった。

断じて甘く無かった。

まぁ、流石に初対面でいきなり自分と同じ量の砂糖を入れたりはしないか。

それにしても、俺がここにいる理由ってあんまり無いような気がする。

カコーン

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ、複数個集まった時の影響は計り知れない」

ジュエルシードってやっぱり恐ろしい物なんだな。

たった一個でポルンガ（仮）が出て来た理由が分かったぜ。

「聞いた事があります。

旧暦の４６２年、次元断層が起こった時の事」

「ああ、あれは酷いものだった」
嫌な、事件だったね……
じゃなくて、もはや何の話をしているのか分からなくなってきた。
「繰り返しちゃいけないわ……」
と、リンディさんが神妙な顔で言い、お茶に角砂糖を入れた。
「あ……」
なのはさんが驚いて小さく声を上げた。
お茶と砂糖って相性いいんだろうか……

「これより、ロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」
リンディさんが言う。
「「え」」
俺を除いた二人が驚く。
ヤバい、もはやかすれてきているとは言え、原作知識をそれなりに持ってる俺としては、色々と驚けない。
「君達は今回の事を忘れて、それぞれの世界へ戻って、元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

クロノくんが言い放つ。

「でも！」

なのはさんは納得いってないみたいだね

「まぁ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょ、今夜一晩よく考えて、それから改めてお話しましょ」

そう、リンディさんが締め括り、お開きになった。

ーーーーーーーーーーーー

お開きになった筈なんだがなぁ。

「ごめんなさいね、あなただけ残って貰って、すぐ終わるから」

なのはさんとユーノくんは一足先に帰りました。

「さて、聞きたいのだけれど、あなたが使った力、あれは一体何かしら？」

モニターに映し出されるは、俺とじんめんじゅ（仮）の戦闘。

ああ、撮られてたのね。

俺がここにいる理由が一気に出てきたな……

……どう説明すればいいの？

第１６話　気（前書き）

能力バレたなう

第16話　気

「俺の力ですか」

「そう、良ければ教えてくれない？」

俺の力……

ふむ。

「気です」

「キ？」

「そう、気」

「……」

「……」

……。

「え？　それだけ！？」

そんな驚いた表情をされても……

「気は気としか言いようがない」

「キって言うのがそもそも何なのか分からないんだけど……」

そこからだったか……

仕方ない。

「ちょっと待ってて下さい」

ピシュン！

「え？」

「なっ！？　消え……」

ピシュン！

「ただいま」

驚いているリンディさんとクロノくん。

……あ、クロノくんいたんだ。

「い、今のは？」

「瞬間移動です」

「瞬間移動？」

「そう、瞬間移動」

「……」

「……」

……。

「だからそれだけか！？」

「だって、瞬間移動は瞬間移動としか言わざるを得ないじゃないか」

「ま、まぁ、あなたの力が凄い事は分かったけど、それは何？」

リンディさんが俺が持ってる袋を見ながら言う。

「ああ、これは今、瞬間移動で俺んちの部屋に行って取って来た……」

袋の中身を取り出し

「ドラゴンボール（全４２巻）です」

リンディさんに渡す。

「もはや、どこからツッコめばいいの……」

何か微妙な顔になっているリンディさん。

まぁ、とにかく

「それを読めば気が何か分かる！」
「僕達は漫画を読む暇など……」
クロノくんがそんな事を言う。
「口で説明してもいいけど……」
「けど？」
「正直めんどくさい」
ピキッ
クロノくんのこめかみに血管が浮き出る。
クロノくん、怒りっぽいな。
「それじゃあ、これ以上クロノくんを怒らせたらどうなるか分からないので、俺はそろそろ帰ります
俺の気についてはそれを読めば本気で分かりますよ、それじゃあ」
ピシュン！
「え、あ！　言うこと言ってさっさと行っちゃったわ……
……ちょっと、読んでみようかしら」
「艦長！？」
ーーーーーーーーーーーー【自宅】

さて、どうしようかな。
おそらくなのはさんは管理局に協力するだろうからなぁ……
よし、俺も協力しようか。
そうと決まれば母さんに相談しよう。

「母さん！」
バーン！
「あらあら、どうしたのレンくん？」
「実は、相談があるんだ」
「しばらく家空けちゃったりするかも～って？」
「なん……だと？」

な、何故分かったんだ……！？
母さんはニュータイプだったのか……？
「お母さんは何でも知ってるんだよ？
レンくんがかいおうけーん！って赤いのになれるのも」

そ、そんな……
いつの間にバレてたんだ……！？
「ちょっと前にレンくんが出掛けた時、暇だったから後をつけていったら見ちゃった☆」
見ちゃった☆
じゃ、ねぇよ！？
えぇ～、もう既にバレてたとか、考えてなかったよ……
「お母さんはレンくんがしたい事をすればいいと思うよ？」
「か、母さん……」
何て話の分かる母なんだ……
前世はこんなんじゃなかったぞ……！
「学校にはお母さんがなんとか言っておくからね」
「ありがとう、母さん
……あ、すっかり忘れてたんだけど、父さんは？」
「ああ、お父さんは出張でしばらく帰って来ないよ」
父さん……

最近見ない（というか普段からそんなに見かけないけど）と思ったら出張って……

「ま、まぁ、いいや
それじゃ、行ってくるよ」

「もう行くの？　お弁当持っていく？」

「いや、いいよ」

「あら、そう？　それじゃ、行ってらっしゃい」

相変わらずニコニコしている母だぜ。

母さんがニコポ持ってたら大変な事になるな……

母さんと結婚した父さんはある意味ニコポされたと言っても過言ではないかもしれない。
よし、じゃあ、行くかな……

「じゃあ、母さん
行ってきます」

「お土産買って来てね～」

お、お土産……
アースラってお土産売ってんのかな……？

ピシュン！

ーーーーーーーーーーーー
シュッ

「こんばんわ」

「！！　あ、あら、びっくりしたわ」

瞬間移動したら、リンディさんがドラゴンボール読んでた。

しかも２１巻、あの短時間ですげぇ読んでる。

第17話　六つのジュエルシード（前書き）

……なんか不完全燃焼みたいな？

今回なんか、自分で書いたのに気にくわない

が、更新する。

妥協も大事だよ、うん（ぁ

第17話　六つのジュエルシード

さて……

俺となのはさんとユーノくんがアースラに来てから結構たった。

その間にジュエルシードを三つ手に入れ、二つフェイトさんに奪われて行きました。

ジュエルシードはあと六つらしい。

でも、俺がさり気なく所持してるジュエルシードはまだバレてないから、あと五つ？

いや、もしかしたらこのジュエルシードはフェイトさんが所持する筈だった奴なのかもしれない。

ならばやっぱり後、六つ？

うーん、わかんねえ、まぁ何とかなるさ。

あ、ちなみに気の事についての説明だが、クロノくんにすげぇ危険視されました。

読んだのか、クロノくん？

安心してくれ、今の俺じゃ１０倍界王拳かめはめ波を地上に向けて

撃ってもちょっとデカいクレーターを作るくらいしか出来んから。
１０倍界王拳でもラディッツと戦う前の悟空より弱いし、多分。
まぁ、とにかくリンディさんには「悟空の真似してたら出来るようになった」と説明した。

ーーーーーーーーーーーー
ウー、ウー。
ん？　何だ？　警報？
「エマージェンシー、捜索域の海上にて大型の魔力反応を感知！」
ついに来たか……
モニターに映る、フェイトさんを見る。
あ、俺、さっきまでクロノくんに雑用をやらされてました。
何でだろう、クロノくんの俺の扱いがなのはさん達と大分違うんだが……
「何とも、呆れた無茶をする子だわ」
「無謀ですね、間違いなく、自滅します」
クロノくんってよく“無謀”って言うよね。
よく考えるとさ、“無謀”ってそうそう言わないよね。

“無茶”とか“馬鹿な事”とかでもいいと思うんだ。

「フェイトちゃん！」

なのはさんが走って来る。

「あの、私、急いで現場に！」

「その必要はないよ、ほうっておけばあの子は自滅する」

なのはさんの言葉にそう返すクロノくん。

「！」

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所で叩けばいい」

……時空管理局って、警察みたいなもんだよな？

クロノくんの言葉が警察のものとは思えないんだが。

「クロノくん」

「？　なんだ？」

スパン！

「うあっ！？」

取りあえず、クロノくんの頭を何故かあったスリッパではたいて
《なのはさん、そしてユーノくん》
念話を送る。
《！　レンヤくん？》
《今から、瞬間移動でフェイトさんの所に連れて行ってあげる》
《ほんと！？》
《うん、だから二人とも俺に掴まって》
《うん！》
《分かった！》
なのはさんとユーノくんが俺の肩に手を置く。
《いきなり空に投げ出されるから気をつけてね》
《うん！》
「リンディさん、クロノくん
ごめんなさい、命令違反する」
そう言い、額に指を当て、フェイトさんの気を特定する。
「な、なに！？　待っ」

ピシュン！

――――――――――

なのはさん達はフェイトさんの所に送り、なのはさん達はフェイトさん、アルフさんと協力してジュエルシードを封印しようとしている。

俺？　俺は傍観してる。

今回ばっかりは俺に出来る事がないんだよ……

六つのジュエルシードを強制封印出来るくらいの威力がある攻撃が無いんだ、一つ一つ封印するにしても不安定な状態だから何が起こるかわかんねぇし……

出来て、少しジュエルシードを抑えるくらいか……

魔法が使えないからなぁ……

魔法も覚えるべきだろうか……。

いや……

・・・

・
・
ユーノくんとアルフさんが魔力の鎖でジュエルシードを抑えている。
だが相当キツそうだ。

やっぱり……

「ユーノくん、アルフさん、俺も出来る限り手伝う事にする」

「レンヤ！」

ユーノくんとアルフさんに並ぶ。

「やった事ないけど……
頼むぞチートボディ！」

かめはめ波のポーズを取り

「１０倍界王拳の、超かめはめ波だ！」

全身の気を手の平に集中させ

「か、め、は、め……」

解き放つ。

「波ぁぁぁ！！」

通常よりも太いかめはめ波がジュエルシードに向かう、そして

「分かれろ！」

かめはめ波が六つに拡散し、それぞれのジュエルシードに直撃する。

すげぇ、ぶっつけで出来た。

「す、凄い！　ジュエルシードの力がかなり弱まった！
これならいけるよ、なのは！！」

「うん！　行くよ、フェイトちゃん！」

なのはさんとフェイトさんの足下に巨大な魔法陣が現れる。

そして、なのはさんのデイバインバスターとフェイトさんのサンダーレイジがジュエルシードに放たれた。

第１８話　雷にぶち当たるの痛い……（前書き）

今回なんか微妙な所で終わってしまった……

次回辺りから如月くんがオリ主っぽい事をする……かな。

第１８話　雷にぶち当たるの痛い……

結果は見事に六つまとめて封印する事が出来た。

が。

ドガァァァァン！！

「！？」

突然雷の音が轟き、海へと落ちる。

「！？　か、母さん？」

フェイトが空を見上げ、恐怖の表情で呟く。

そして、再び轟音と共に、雷が落ち

フェイトに直撃する

「うあああああ！？」

かと思われた。

「……え？」

フェイトの目の前には、雷に打たれ、焼け焦げた煉夜がいた……

そして、煉夜はゆっくりと海に

ドポーン！！

落ちて行った。

「れ、レンヤくん！！」

なのはの悲鳴が辺りに響き渡った……

ーーーーーーーーーーーー

ゴポゴポゴポゴポ……

ゴポゴポゴポ……

ゴポゴポ……

ゴポ……

……。

カリッ

バシュウウウウ！！！！

ザッパーン！！

「復活！！」

スッゴい、痛かった！

「え？」

なのはさんがハトが豆鉄砲くらったような顔をしている。

「なのはさん、何か忘れてないか？
俺には仙豆と言う反則的な道具があるんだぞ？」

なのはさんに向けて、仙豆の入った袋を見せる。

「あ……」

そういえば、というような顔をするなのはさん。

しかし、本当に痛かったよ。
１０倍界王拳を使ってたからまだよかったものの、もし界王拳を使ってなかったら死んでたかもしれない、割とガチで。

俺、バリアジャケットを着てるわけじゃないしさ。

二次創作だと、あの雷を受けるオリ主達がいるけど、凄い勇気だ。

俺なんて１０倍にしてるから大丈夫だって思って受けたんだけどなぁ……

でも、フェイトさんに雷が落とされると分かってて、ただ見ているだけ何て出来ないしなぁ……
みんなより強い力を持っている分、余計に。

しかし、プレシアさんの魔法の威力。

そして、それをフェイトさんに向けるという非道さ。

でも、原作だとフェイトさんはアレを受けても大丈夫だったから、非殺傷設定ではあったのか？

手加減してくれていたのか、いないのか、微妙な感じでわかんねぇ……

ガキィィィン！！

と、そこまで考えていたら、いきなり何かがぶつかり合ったような音が聞こえた。
音の方を見てみると

「ちぃ！」

アルフさんの拳を受け止めている、クロノくんがいた。

いつの間に……

そして、アルフさんはクロノくんを弾き飛ばし、三つのジュエルシ

ードを奪い

「フェイト！　退くよ！」

「え、あ、う、うん！」

魔力弾を海に叩きつけ目眩ましをし、フェイトさんと逃げて行った。

ちなみに残りのジュエルシード三つはクロノくんが回収してました。

うーん。

ここは敢えて追いかけない事にしよう。

ーーーーーーーーー

アースラに戻り

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。

勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達をも危険に巻き込んだかも知れないということ、それは分かりますね？」

リンディさんに怒られてます。

うーん、俺はちょっと考えたい事があるから、取りあえず話半分に聞いとこう。

さて、これからどうするか……

今まで原作沿いに事を運んで来ていたが、そろそろ勝負に出てみる

のがいいかもしれない。
しかし、そのためにはプレシアさんのいる、時の庭園に行かなければならない。
どうしたものか……
「ーーーただし、二度目はありませんよ？　分かりましたね？」
「「は、はい！」」
「……」
「レンヤくん？」
「え？　あ！　はい！」
ヤバい、話半分所か全く聞いて無かった。
……
あの後、黒幕がプレシアさんだと判明し、エイミィさんにプレシアさんの事についての話を聞いた後、俺達は休暇っぽいのを貰い、久し振りに家に帰って来た。
あ、ちなみにリンディさんに仙豆の事を聞かれたから、一粒渡してきた。
仙豆って一体どういう風になってるのか調べてみるらしい。

「レンくん、お土産は？」

「アレ、本気で言ってたのか……」

帰ってそうそう、母さんがそんな事を言った。

え、えーと、お土産……

あ！

「アースラの食堂で貰ったクッキーならあるが」

「クッキーかぁ、じゃ、紅茶入れるから一緒に食べようか」

そう言い、母さんはキッチンに行く。

そういえば、今リンディさんはなのはさんちにいるみたいだが、俺んちにも来たりすんのか？

なんだかんだで母さんに色々バレてるから別に来なくてもいい気がする……

「はーい、紅茶淹れたよ」

母さんが戻って来た。

って、そういえば

「母さん、父さんは？」

「お父さん？　お父さんは海外に出張中だからまだ帰って来ないよ？」

父さぁぁぁん！！

出張って海外かよぉぉぉ！？

出張っつか、父さんだけ転勤してんじゃないかという。

父さんの存在感が薄すぎて、俺の父さんは実はいないんじゃないかと思えてきた。

「レンくん、今日と明日くらいはいるんでしょ？」

「ん？　うん、多分いると思うけど」

「じゃ、レンくんが休んでる間の授業のノート渡すから、しっかり予習してね」

なん……だと……

１０日以上休んでるから、ノートが凄い事に。

転生した身としては小学校の授業とか余裕なんだが……

まぁ、やっとくか。

……

「二人揃って休んで、二人揃って登校って、アンタ達二人で何かしてたの？」

今日は久し振りの学校。

久し振りに四人揃った気がする。

「べ、別にそんな事ないよ？」

「そうだな、俺はちょっとした家の事情だよ
俺の方が休んでる期間長かっただろ。
今日は偶然二人揃って登校しただけだよ」

そういう事にしておこう。

「ふぅん、ま、でも、元気そうでよかったわ」

何かちょっと疑わしげな表情をしてるアリサさん。

ははは……

・

・

・

・

・

「今日の放課後、一緒に遊べるかな？」

すずかさんが言う。

「うん、大丈夫！」

「じゃあ、うちに来る？　新しいゲームもあるし」

新しいゲームか……

気になる、が

「俺は参加出来ないから悪しからず」

ちょっと、やることが。

「何でよ？」

何でって言われても……

「また適当な理由つける気じゃ……」

「そんな事をしても無意味だという事を理解しているから、変な理由付けはしない。

ただ今日はやることがあるだけだから」

「そっか、残念、レンヤくんとも久し振りに遊びたかったんだけど」

すずかさんが優しすぎて笑えない自分がつらい。

《というわけでそっちは任せた》

《え、う、うん……？》

なのはさんは何かよく分かってないみたいだが、まぁいいか。

第１９話　願い（前書き）

何かご都合っぽい感じがしないでもないが、無印編そろそろ終了。

第19話　願い

「そうか……
思いついたぞ……、こう言えば二人共……」
これならば多分いける！
そうと、決まれば……！
ピシュン！

［〜アースラ〜］

「クロノくん！」

「！　君か……
毎度の事だが、何の前触れもなしに現れるんじゃない」
やれやれ、といった感じで言うクロノくん。
そんなの気にしたら負けだ。
まぁ、管理局からしたら俺の瞬間移動は厄介かもだが。
「というか教えて欲しい事が……って、コレは……」
クロノくんとエイミィさんが見ていたモニターを見上げる。

そこには……

『フォトンランサー・ファランクスシフト！！』

バインドで拘束されたなのはさんとなのはさんにフォトンランサーを放つフェイトさん。

……いきなりクライマックスなんだが。

時間を忘れて、ドラゴンボールを読み直してたからな……

なのはさんとフェイトさんが戦う時間帯など忘れていたよ。

ちなみに言っておくがドラゴンボールを読み直したのは楽しむためじゃないよ？

神龍が現れる場所付近を読み直してたんだ。

『これが私の、全力全開！！
スターライト・ブレイカァァァァ！！』

フェイトさんをバインドで拘束し、極太光線を撃つなのはさん。

「な、なんつー馬鹿魔力……！」

「なんという太陽系破壊かめはめ波」

流石なのはさんだ。

「う、うわ……
フェイトちゃん、生きてるかな……？」

エイミィさんが呟く

まぁ、確かにあんなん受けたら生きてるかどうか心配になるよね。

多分、あのスターライト・ブレイカーは素の俺じゃ確実に対抗出来ないレベル。

それはそうと、モニターではバルディッシュがジュエルシードを八つ吐き出す所だった。

あ、やっぱり俺が一個隠し持ってるから、原作よりもフェイトさんの所持するジュエルシードの数が少ない。

「よし、なのは、ジュエルシードを確保して、それから彼女を」

クロノくんがそこまで言った時

「いや、来た！」

エイミィさんがそう叫んだ。

モニターを見ると、フェイトさんに雷が襲いかかり、八つのジュエルシードを奪って行った。

「ビンゴ！　尻尾掴んだ！」

「不用意な物質転送が命取りだ、エイミィ、座標を」
「もう、割り出して送ってるよ！」
「武装局員、転送ポートから出動！
任務はプレシア・テストロッサの身軽確保です！」
『『『はっ！』』』
リンディさんの言葉に局員達が応える。
おお！
コレを待っていた！
俺も引っ付いて行くぞ！
ピシュン！
俺は局員達の場所に瞬間移動し、転送されていった。
ーーーーーーーーーーーー
［〜時の庭園〜］
……よし、とうとう、やって来れた……！
後は、プレシアさんの所に言って局員達が乗り込んで来る前に決着をつける！

額に指を当て、気を探る。

……。

……。

……。

見つけた、一番遠くにポツンとある気、これがプレシアさんだ！

ピシュン！

ーーーーーーーーーーーー

シュンッ！

「やっぱり、そうか。

見つけたぞ」

「あなた、誰？」

突如現れた俺に眉根を寄せるプレシアさん。

とうとうご対面だな……

あ、足震えそう。

「俺は如月　煉夜

プレシアさん、貴方達を救いに来た！」

「救い……？　何を言っているのかしら」

ふー、怖い。

落ち着け、俺。

「俺はフェイトさんだけじゃなく、アリシアさんも貴方も救う気で、ここにやって来た」

帰ったらまた、リンディさんに怒られるかもしれないな。

「！！　何故、アリシアの事を……！」

初めて、プレシアさんの顔が驚きに変わる。

「……プレシアさん。

もし、俺がアリシアさんを生き返えらせる事が出来ると言ったらどうしますか？」

「どういう、ことなの？」

俺は今まで隠し持っていたジュエルシードを取り出す。

「このジュエルシードは願いを歪んだ形にではなく、正しく完全な形で叶える事が出来る」

「！？」

プレシアさんの顔が驚愕に染まる。

「これを使えば、アリシアさんは生き返る事が出来る」

「……それは、本当、なの？」

……界王拳！

バシュン！！

「！！」

「落ちついて聞いて下さい
今の俺に貴方の技は殆ど効かないし、すぐに避ける事が出来る。
ですからこのジュエルシードを奪おうなどとは思わないでください」

あと、奪ってもポルンガの出し方が分からないだろうしね。

「このジュエルシードを使うにあたって、二つ条件を出します。

一つは、フェイトさんと話し合う事」

「何を……」
「貴方はフェイトさんにこれまで何度も酷い事をしてきた、だけど
俺は思うんだ、貴方は心の底からフェイトさんを嫌ってはいないん
じゃないかと」

俺の勝手な思いだがな。

「……」

「だから、ちゃんと話し合う、というか話して上げて下さい」

「……いいわ、アリシアが生き返るのなら」

やはり、アリシアさんが一番って感じなのかな……

「二つ目はコレから先、フェイトさんもアリシアさんも悲しませない事」

「でも、私はもう……」

「俺の思い描く通りになれば、きっと大丈夫です」

ふー、何か俺が俺じゃないみたい、こんなに真面目に喋ったのは何時以来だ？

「この二つは守ってくださいもし、守らなかったら……」

「……守らなかったら？」

え、と、えーと。

うーん……

あ！

「アリシアさんの言葉使いをフリーザ様にする」

「……は？」

考えてみてくれよ

フリーザ口調のアリシアさんを……

―ホッホッホ！　見てください、フェイトさん！
綺麗な花火ですよ！　ホーホッホッホ！！―

……嫌すぎるな。

「何かよく分からないけど、凄い嫌だと言う事は分かったわ」

――――――――
「じゃ、時間もないのでさっさとやりますか」

地面にジュエルシードを置く。

「貴方、もしアリシアが生き返らなかったら……」

「そうなった場合はどうにでもしてくれていいです」

凄い恐ろしい表情で言うプレシアさんの腕にはアリシアさんが抱かれている。

生き返った時に何かよくわからない液の中にいるとか恐ろしいだろ

うから出して貰った。

「さて……」

やるか。

真面目な時に言うほど恥ずかしいものはないけど、仕方ないよね。

「タッカラプト・ポッポルンガ・プピリット・パロ！！」

ナメックの合い言葉を叫ぶ。

「……？」

怪訝な表情のプレシアさん。

ぶっちゃけ、ポルンガ（仮）はこの言葉以外でも出るかもしれないが、コレが一番確実な気がする。

バチ、バチッ！

ジュエルシードが光り

ビリビリビリビリビリビリ！！！！

震えだす。

そして

バシュウウウウゥゥゥ！！
光が昇り
《願いは決まったのか……》
久しぶりのポルンガ（仮）が現れた。
「な……！　これは……」
ジュエルシードからドラゴン出て来たら誰でも驚く。
「ああ、決まった、俺の願いは」
考えたんだ、俺的にはよく考えたと思うんだ。
「この場にいる、死亡者や病人を含めた全員を完全回復、元気にしてくれ！」
まぁ、アリシアさんを含めこの場にいるのは三人だけだがな。
《……》

頼むぞ……
お願いします！

《容易い願いだ……》

ポルンガ（仮）はそう言い、目を赤く光らせた。

……！

アリシアさんに気が……

「う……」

「！？　あ、アリシア……？　アリシア！！」

「あ……れ？　お母、さん……？」

うーむ、プレシアさん、病気も治ってるはず何だが気付いてないのかな……

自分の身体よりもアリシアさんが大事なのかなやっぱり。

《願いは叶えてやった……
では、さらばだ！！》

ポルンガはそう言って、消えていった。

ドシュウゥゥゥ！！

ドゴン！

キラン☆

……そしてジュエルシードは天井をぶち破ってどっかに飛んで行った。

……クロノくんにどやされそうだな……。

第２０話　ジュエルシード一個消失。（前書き）

本来この話で無印を終わらせる気だったのに、予想外の事態で中途半端な状態で更新。

どうもすいません。

第２０話　ジュエルシード一個消失。

「レ・ン・ヤ・くん☆」

リンディさんが怖いです。

特に☆とか。

「次はないって、私、いいましたよね？」

「い、いや、結果的に良かったわけで」

「それはそれ、これはこれ♪」

リンディさんが恐すぎるんですが。

フリーザにフルパワーの攻撃を足で蹴り返されて、男泣きしてるベジータな気分。

「と言いたい所ですが、多目に見ます」

ウェ？

本当に？

「ですが本当に今回だけですからね？

もし次、こんな事があれば……」

「了解しました」

リンディさんの年相応の怖さを見た。

しかし、次って、いつになるやら。

あ、ちなみに何故怒られてたかと言うと、勝手に局員達について行き、勝手な行動をしたから。

まぁ、当たり前だよね。

あの後、局員達がプレシアさん達と俺がいた部屋に乗り込んで来て、プレシアさんはすんなりアースラに連行されて行った。

アースラにやって来たプレシアさんは近寄ってきたフェイトさんに「ごめんなさい」と一言謝っていた。

アルフさんが信じられないという表情をしていた。

俺はなのはさんに誉められ、怒られた。

無茶しちゃダメだよって。

アナタも大概無茶してますよね。

フェイトさんにはお礼を言われた、素で頭を撫でそうになってヤバかったです。

取り敢えず仙豆を渡しておいた。

クロノくんには怒られた。
だからジュエルシード一個どっかいっちまったって言ってもっと怒らせてみた。

そして、アリシアさんは……

「むー」

何か俺に引っ付いてる。
なんで？

プレシアさんは一応犯罪者なのでそれなりの処置を取らされているためそばにはいない。

まぁ、アリシアさんにとってはいきなりな状況でついて行けてないのかも知れんが……

なんで俺に引っ付いてるの？

あれか、お母さんと親しげに話してたから、取り敢えず引っ付いとこうってか？

別に親しげに話してたわけじゃないけど……

取り敢えず俺はアリシアさんとフェイトさんを対面させて、放置してみた。

「……え、えっと……」

「あう……そ、その……」

何か面白い。

「にゃはは……」

なのはさんがこの光景を見て苦笑いしている。

「フェイトさん、アリシアさんはフェイトさんより年下のように見えるが、フェイトさんのお姉さんだぞ」

「お姉、さん……？」

うんうん。

「そしてアリシアさん、フェイトさんはアリシアさんの妹なんだぞ？」

「いもうと？」

そうそう

「だからフェイトさんはアリシアさんを『お姉ちゃん』と呼び」

「お、お姉……ちゃん？」

「そしてアリシアさんは……

そうだな、どんな呼び方でも」

「フェイトちゃんのアリシアちゃんの呼ばせ方に何か意図を感じるの」

そ、そんな馬鹿な。

「お、お姉ちゃん」

顔を少し赤く染めたフェイトさん。

「フェイト！」

フェイトさんとは裏腹に笑顔でフェイトさんを呼ぶアリシアさん。

しかし、いきなり呼び捨てである。

……まぁ、いいのか。

「お姉ちゃん！」

「フェイト！」

この後も何回か『お姉ちゃん！』『フェイト！』と呼び合ってました。

うん、もう大丈夫だな。

あとはアリシアさんにフリーザ様の魅力を伝えるだけだ……！？

な、なんだ？　プレシアさんの気が上昇した……！？
や、やっぱり、フリーザ様の魅力を伝えるのは止めよう……
ーーーーーーーーーーー
「クロノくん」
「何だ？」
今、俺はクロノくんと二人で話をしております。
「プレシアさんって結局どうなるんだ？」
「そうだな……」
「懲役1ヶ月くらいとか？」
「それは流石に刑が軽すぎるぞ」
やっぱり……
「でも、次元震とかを起こしたわけじゃないし、それなりの刑にしてくれないと、フェイトさんもアリシアさんも悲しむ。
特にアリシアさんはまだ完全に状況を理解してないからな」
原作よりは、被害がないからなぁ……
だから結構軽けりゃいいんだが……
「なんとかしてみるが、プレシア・テスタロッサに関しては分からないな……」

ふーむ。

そういや、フェイトさんは多分本局に行くんだろうが、アリシアさんは？

いや、ついて行くんだろうけど……

プレシアさんは裁判とか何かしらあるから……

原作通りにリンディさんがフェイトさんやアリシアさんの面倒をみるのかな……？

うん、謎だ。

最終話　別れ（前書き）

よし！　何とか無印終わった！

最終話　別れ

えー、俺達は今感動の場面を暖かい目で見ています。

アレだ、なのはさんとフェイトさんの別れの挨拶について来てる。

俺、クロノくん、ユーノくん、アルフさん、アリシアさんはちょっと離れた所で待機。

「アリシアさん、今、調子はどうだ？」

「ん？　スッゴく元気！」

そうか。

ポルンガ（仮）を信じてないわけじゃないけど何かあったら大変だしね。

大丈夫そうだが。

「ああ、そう言えばクロノくん

前に渡した、仙豆、どうなったんだ？」

「ああ、アレか……」

クロノくんの顔が険しくなる。

「調べてみたが、全く普通の豆だったよ」

ほぉ、何故？

「何故、傷を治す事が出来るのか、１０日も飢えをしのげるのか、全く分からなかった」

流石仙豆、サイヤ人の底無しかと思うほどの体力を一粒で全快させれるだけあるぜ。

摩訶不思議すぎる。

「ああ、こちらもキミに聞きたい事があるんだが」

クロノくんがユーノくんで遊ぶアリシアさんをチラリと見ながら言う。

「何だ？」

「アリシア・テスタロッサは数年前に亡くなっていたはずだ。何故生きている？」

その事か……

「それは、神龍のおかげだ」

「……何？」

「俺が神龍に願ったんだ、アリシアさんを生き返らせてくれって」

「そんなこと……」

「出来ないとも言えんだろう？

俺には仙豆だってあるし、気だって使えるぞ？」
正直にジュエルシードに願ったって言ったら何かダメな気がするし。
まぁ、クロノくんがジュエルシードを悪用するなんて考えちゃいないが。
「それが本当ならやはりキミは滅茶苦茶だな……」
はぁ、と呆れるクロノくん。
ドラゴンボールを基準にしたら俺なんてまだ優しい方だぞ、サイヤ人とかじゃないだけマシ。
ーーーーーーーーーーーー
「あの子は、なのはは本当にいい子だね……グスッ
フェイトが、あんなに笑ってるよ……」
アルフさんが泣いてる。
「アルフ、泣いてる……
大丈夫？」
「大丈夫だよ、嬉し泣きだからね」
心配そうにしているアリシアさんにユーノくんがそう言う。
「さて、そろそろか……」
そう言い、クロノくんはなのはさん達の方に歩いて行く。

「時間だ、そろそろいいか？」
「うん」
「フェイトちゃん！」
なのはさんは自分の髪を結っているリボンを外し
「思い出に出来る物、こんなのしかないけど」
フェイトさんに差し出す。
「じゃあ、私も」
フェイトさんも髪の紐を取り、なのはさんに差し出した。

「ありがとう、なのは」
「うん！　きっとまた、会おうね」
「うん、きっとまた」
感動的だな。
「ああ、そう言えば……」
「どうした？」
「餞別として、フェイトさんとアリシアさんにプレゼントがあったんだが……

家に忘れて来たな……」

うーん、まぁでも

「そんな、プレゼントなんて気にしなくていいよ」

「えー、欲しいよ、プレゼント！」

フェイトさんは遠慮してるがアリシアさんは正直ですね。

「ああ、大丈夫だ」

ピシュン！

……。

シュッ！

「すぐに取って来れるし」

「キミが何度もソレをするから、あまり不思議に思わなくなってしまったではないか」

慣れって恐いよね。

俺も無表情が慣れてね、笑い方を最近忘れて来てる。

「じゃ、これを二人にプレゼントだ」

紙袋を渡す。

「こ、これは？」

フェイトさんが地面に紙袋を置き、中を見る。

「それは、ドラゴンボール全４２巻（ドラゴンボール大全集付き）だ暇な時に読むといいよ」

「あ、あはは……」

「わー！　ありがとう！」

フェイトさんは苦笑い、アリシアさんは笑顔。

うん、いいね。

「ちょっと待て、キミは一体幾つその漫画を持っているんだ？キミが僕達に渡した分がまだアースラに残ってるんだぞ？」

「気にしたら負けだ」

ーーーーーーーーーーーー

「それじゃ、行くよ」

クロノくんが言う。

「うん、またね、クロノくん。アルフさんも元気でね」

「うん、またね」

クロノくん達の足下に魔法陣が現れる。
「それではな、フェイトさん、アリシアさん、アルフさん、クロノくん」
「またね！」
アリシアさんの笑顔が眩しい。
「バイバイ」
「それじゃあね！」
アリシアさんに続き、フェイトさん、アルフさん。
「前から思っていたが、僕の事はクロノでいい、くんはいらない」
「そうか、じゃあな、クロノ」
そういや、俺が呼び捨てにした人はクロノが初めてじゃないか？
「ああ」
魔法陣の光が強くなってくる。
「バイバイ！　またね、フェイトちゃん！　クロノくん！　アルフさん！　アリシアちゃん！」
「またね、なのは！」

光が強くなり、辺りを包む。

光が収まった時には、みんな行った後だった。

―テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話　無印編　完―

第1話　ブルータス　前編（前書き）

まだもうちょっとだけ続くんじゃ。

一応この話からA' s編、だがはやて所かヴォルケンもでない。

この話はブルータス回、まさかの前後編。

最初に言っておく！

ブルータスはリーゼ姉妹の片方ってわけじゃないので悪しからず！

しかし、また最高神（笑）がやらかしそうだぜ……

第1話　ブルータス　前編

やぁ、如月だ。

クロノ達、アースラ組の皆が帰ってしばらくたったんだが……

大変な事が起きた。

何って？

いや、実は俺がニコポの実験をしてしまった猫、ブルータスが家からいなくなった。

一体どうしたんだろうな？

と、言うわけで。

「母さん、ブルータスがどこにいるか知らない？」

母さんに聞く事にした。

「んー？　ルーちゃん？　さぁ、お母さんは分からないなぁ……」

ルーとはブルータスの事。

母さんは普段ブルータスをルーと呼ぶ。

大柴か。

「そうか……
あ、父さんは？」

「ん？　接待ゴルフ」

また居ねぇ……

ーーーーーーーーーー
「俺のブルータスを知らないか？」
「えーと、ブルータスってレンヤくんのネコちゃんだよね？
うちにはいないよ？」

俺は今、すずかさんの家にいる。

猫天国のすずかさん邸にならブルータスがいるかもと思ったんだが
……

「そうか、ありがとう」

「ううん、でも、どうしたの？」

「いや、最近ブルータスが家からいなくなってな、ちょっと心配で」

本当どこ行ったんだ？

「お散歩とかじゃないよね？」

「うん、多分。
長い期間いないわけだし。
まぁ、いい、ちょっと他もあたってくるよ」

「あ、うん。
ごめんね、力になれなくて」

すずかさんが申し訳なさそうに言う。

「気にしないで、じゃあね」

そう言って、すずかさん邸を後にした。

さて、どうするか。

気を探るにしても、最近ブルータスの気が感じれなくなって来てたんだよなぁ……

んー、猫ってよく、死に際を見せないって言うよな？

……気を感じれなくなって来ても、元気だったぞ、アイツ。

ヤベェ、本気で心配になってきた。

ーーーーーーーーーーーー

「と、言うわけでブルータスを見てないか？」

「前にすずかの家に来た、あんたの猫よね？

私は見てないけど……」

アリサさんも知らないか……

てかブルータスは一回もアリサさんの家に来た事がないんだから、居るわけはないか……

「そうか、ありがとう

じゃあな！」

次は……

「あ、ちょっ！　何があったか説明しなさいよ！　もう！」

アリサさんの家から出て誰も見ていないのを確認し、なのはさんの気を探り、特定する。

ピシュン！

「なのはさん！」

「ふぇ？　あ！　だ、ダメだよ、レンヤくん！？　今着替え中！！」

ーーーーーーーーーーーー

「まことに申し訳ございませんでした。

俺ごときがラブコメの主人公みたいな真似をして本当にすみませんでした」

絶賛土下座中。

「あ、あぅ……

も、もういいから、ね？」

なのはさんが優しすぎて生きるのが辛い。

いっそ、張り倒してくれたらまだ気が楽なのに……！

今日の教訓。

瞬間移動は時と場所を考えるべき。

正直、いきなりなのはさんの部屋に来るとかどうかしてた。

「そ、それより、どうしたの？　慌ててたみたいだけど」

「う、うん、実は、ブルータスを探してるんだが、どこかで見たりしてない？」

「レンヤくんのネコちゃん？

えーと……んー」

何か考えてるなのはさん。

「んーと……

あっ！　そうだ、確かこの前、ユーノくん（フェレット状態）を追いかけてたネコちゃんがそうだった気がする」

ユーノくん、猫に人気だな。

まぁ、猫からしたら獲物と思ってるのかもしれんが。

「そこどこ？」

「公園だよ」

ふむ、もしかしたらいるかも知れない。
よし、行ってみるか！

「じゃ、行ってみるよ
ありがとう、なのはさん
そして、本当ごめん」

「う、うん、ブルータス、見つかるといいね
一緒に行けなくてごめんね」

「ああ、気にしないで、それじゃ」

ピシュン！

ーーーーーーーーーーー
瞬間移動で公園近くに来た、運よく誰にも目撃されてないな……
なのはさんの部屋に行っちまってたから、下手に部屋を出て士郎さんか恭也さんに鉢合わせたりしたら地獄を見る事になるしな……
瞬間移動しか移動手段がなかった。

まぁ、それはいいとして、公園に来たわけだが。
見た限りブルータスはいない。

「おーい、ブルータス〜

いないのかー！」

……。

……出て来ないな。

普段、俺が呼ぶとすげぇ勢いで飛びついてくるんだが……

うーん……

もう少し探すか……

……

結局、ブルータスは見つからなかった。

そして、今日も家には帰らなかった。

「どこにいったんだ……」

第2話　ブルータス　後編（前書き）

ふぅ、ちょっと何時もより更新が遅れた。

ブルータス強化回

相変わらずヴォルケンやはやては出ません。

ちなみに次の話も登場しません。

正直番外でよかったかもしれないが、まぁ、いいか。

第2話　ブルータス　後編

アレから何度もブルータスが行きそうかな、という場所を探した。
が、やはりどこにもいなかった。

「やっぱりもう、アイツは……」

考えられる事は2つ。
1つはニコポの効果がなくなり家を出て行った。
もう1つは自らの死に際を見せないためにどこかに消えた。

前者ならまだいい。
しかし、後者だったら……

……。

もう、帰るか……

ーーーーーーーーーーー
「あ、レンくんお帰り、ねぇねぇ聞いて聞いて、今日お母さん、スクラッチで一等当てちゃった！」

「ああ、そう
俺、部屋行くね」

母さんの話をろくに聞かずに自室に向かう。

「うぅ、スゴい事なのに……」

※一等１０００万。

・
・
・
・
・

二階に上がり、自室に行く。

やっぱり、あれだけ探してもいないし、これだけ家に帰って来ないと言うことは……

ガチャ……

「もう、探すのは諦m」

「あ！　ご主人さま！」

「……」

パタン……

扉をゆっくりと閉める。

ふぅ……

ちょっと疲れてんのかな？

なんか見てはいけないモノを見た気がする。

落ち着け、落ち着け、俺。

よし……！

ガチャ

「ご主じ」

バタン！

いる！　やっぱりいる！

何か同い年くらいの女の子がいる！

ど、どどどどういう事！？

だ、誰？　誰！？

カチャ……

俺が混乱してると、扉が控えめに開き、隙間から

「あ、あのぅ……
ご主人さま……？」

と、顔を覗かせた女の子が。

「よし、大丈夫、ちょっと落ち着こうか」

女の子の肩に手を乗せ、そう言う。

「え？　え？」

「うん、大丈夫。
とにかく部屋に入ろう、話はそれからだ」

ーーーーーーーーーーーー
さて……

「キミは誰だ？」

「え？」

俺の言葉にキョトンとした表情の女の子。

「ご主人さま、私が分からないんですか……？」

「いや、分からないというか、キミの気からもしかしてって奴がいるんだが……」

女の子を見てみる。

頭にぴょこんと生えてる猫耳。

ゆらゆらと揺れてる、“二本”の尻尾。

全体的に某同人ＳＴＧの橙みたいな……

「うん、アイツとは種族が違うし、いや、根本的には同じかもだが、姿が違うし」

だがなぁ……

ここまで一致する気ってあるか……？

「あ！　そう言えば、ご主人さまにお手紙が」

ん？　手紙？

女の子に渡された、手紙を見てみると

そこには――

【仙豆の時以来じゃのう、元気にしとるか？
相変わらず（笑）が取れない最高神じゃよ。

お主がこれを読んどるのなら、きっとお主のそばに少女がおるじゃろ？

その少女についての説明じゃが……

ぶっちゃけ、その少女はお主が飼っとった猫じゃ】

「やっぱりかっ！！」

「ふみ！？」

クソ、あのじいさんの仕業だったのか……！

転生させた後もそれなりに関わってくる神様も珍しいな、おい。

えー、続きは……

【何故、少女の姿になっとるかと言うと、その猫はお主の近くにいる事で何故か気を操る事が出来るようになっとっての。

じゃから面白いから、ちょっとワシのいる神界に喚んで気を使うのに適した体にしてみた☆】

してみた☆じゃねーよ！！

腹立つぅ！　☆が腹立つぅぅぅ！！

だがしかし、もしかして、ブルータスの気が感じられなくなってきてたのはブルータスが自分の気を抑えてたって事か？

【ちょっとその体に慣れるためにしばらくこっちにおったから心配させたかの？
それは謝っておく。
ああ、ちゃんと猫の姿にもなれるから、安心せい
それと、その子はその世界でいう使い魔、というのではないからの】
なるほど、使い魔じゃないという事は、いよいよ俺の魔力が無駄以外の何者でもないモノになったわけか。
【それじゃ、これからも頑張ってくれい。
それではの。】
以上、と。
これはアレだな、これから先、また不思議な事態が起こったら大体最高神（笑）のせい、で大丈夫だな。
ていうかニコポとナデポをだな……
はぁ……
「つまりお前はブルータスなんだな？」
「はい！」
笑顔で応えるブルータス。

この橙みたいな子がブルータスか……

「ちょ、ちょっと猫になってみてくれ」

「はい！」

俺がそう言うと、ブルータスは猫になった。

「ブルータスじゃないか……」

これは間違いなくブルータス。

マジか、マジなのか。

「ニャー」

「ブルータス、お前、猫状態だと喋れないのか？」

「ミー！」

アルフさんみたいに喋ったりは出来ないってワケね。

だが、猫状態だと尻尾は一本なんだな

何で人状態で二本に増えてたんだ？

まぁ、いいか。

「ご主人さま、コレからもよろしくお願いします！」

人状態になったブルータスがそう言う。

「あ、ああ……

何ていうか、超展開ではあるんだが、まぁ、よろしくな」

スッ、ポン！（頭に手を置いた音）

「あ……ご主人さま……」

「……！？」

バッ、ズザァァァァ！！（思いっきり後ずさった音）

「はぁぁ、危ねぇ……！

無意識に撫でる所だった……！」

「ご、ご主人さま？」

せ、セーフか？　置いただけだからセーフか？

ナデナデしてないからセーフだよなあ！？

「ふぅ、何でもない

ま、まぁよろしくな」

凄い焦った……

ま、まぁとにかく、これからどうするか……

第3話　超猫（前書き）

ギリギリ、更新！

次あたりからヴォルケンかはやてか……
誰かが出るはず！

第3話　超猫

「母さん、コイツを見てくれ、どう思う？」

「あらあら、レンくんの彼女さんかしら？」

取り敢えず母さんにブルータス（人状態）を見せてみると、そんな言葉が帰ってきました。

「か、彼女……

ご主人さまの……ふにゃ……」

何だろうね、スッゴい嬉しそうにしてるね。

最高神（笑）が手紙をこっちに送ってこれるんなら、こっちからも手紙送れないのかな？

ニコポ、ナデポを取り消せよって送りつけたいよね、うん。

「いや、彼女じゃなくて、この子は実はブルータスなんだよ」

「あら、ルーちゃんだったの？

しばらく見ないうちに大きくなったわねぇ」

マジか？

「母さん、それ本気で言ってる？」

「うん」

俺の母さんは天然すぎるんじゃないだろうか

「ブルータスが猫から人になったのに驚かないの？」

「だって、レンくんが赤いのになれたり、空を飛べたりするんだから、ネコから人になれてもあんまり不思議じゃないよ？」

赤いのって界王拳の事だよな。

そうか、母さんにとって猫から人になるのは俺が界王拳使える事と同じ程度の驚きなのね。

俺の母さんは心臓に毛が生えてるのか、ただ全体的にノリが軽いだけなのか。

後者っぽいな。

「これからもウチで暮らすのよね？」

「まぁ、そうなるかな」

「嬉しいわ～

お母さん、女の子も欲しかったから」

「さいですか……」

俺の力の事を知ってるから母さんにブルータスの事をカミングアウトしたが……

驚くほどすんなりと話が終わったな。

「あー、うん、じゃあ、俺達、出かけてくるから」

「行ってらっしゃい、夕飯までには帰って来てね」

ーーーーーーーーーー

「さて、まず最初に、ご主人様って呼ぶのを止めようか」

「え……、どうしてですか？」

「想像してみようか、小学生の男の子が同い年くらいの女の子にご主人様と呼ばせてる図を」

どんなプレイだ。

しかし、ブルータスはよく分からないのか首を傾げている。

「まぁ、とにかく俺の事は煉夜と呼んでくれて構わないから」

ご主人様は俺の未来のために止めてくれ。

「レン、ヤ……さま？」

……。

「いや、煉夜」
「レンヤさま」
「煉夜」
「レンヤさま！」
「れ、あぁ、もういいや、それでいいよ」
ブルータスの俺の呼び方はレンヤさまに決まりました。
ご主人様よりはマシだろう……
「じゃ、今からなのはさんの家に行くからな」
「レンヤさまのお友達の所ですか、わかりました！」
……
銀髪オッドアイ少年＆ぬこ少女移動中・・・
……［〜高町家・玄関〜］
「というわけでユーノくんに結界を張ってもらいたい」
「ど、どういうわけで？
というか、その女の子は？」
ユーノくんが聞いてくる。

「ブルータスです！
よろしくお願いします！」
うん、元気いいな。
「ふぇ？　ぶ、ブルータスって……」
なのはさんが目を丸くしている。
「うん、何かこんな感じになって戻って来た」
「レンヤの使い魔になったの？」
「んー、違うが……
まぁ、似たようなモノと思ってもらっていい」
実際は全然違うけど。
「アレだ、大体最高神（笑）のせい」
「……え？」
「さて、ブルータスがどの位の力を持っているか調べたいから、公園あたりにでも行って結界を張ってくれないか？」
「ちょ、レンヤ？　大体最高神のせいってどういう事！？　いきなり過ぎて分からないよ！」
気にしちゃダメだ。

――――――――――
さて、公園に来て結界を張ったわけだが。
「じゃ、ブルータス、お前の出来る事を見せてくれ」
「はい！」
「ブルータスちゃんってレンヤくんと同じ気が使えるんだよね？だったら、かめはめ波とか出来たりして……」
なのはさんが言う。
確かに気は使えるようだが……
「流石にかめはめ波はどうだろう」
ブルータスの気なら出来て気弾くらいじゃないかな。
「レンヤさまー！　いきまーす！」
ブルータスが少し離れた場所から俺に言う。
その瞬間、ブルータスの気が急激に上がった。
「なん……だと……？」
そして、ブルータスは、みんな大好きかめはめ波のポーズを取り
「ね……」

気を溜めていく。

「こぉ……」

しかし、“ねこ”？　“かめ”じゃないのか？

「はぁぁ……」

まさか……

「めぇぇ……！」

これは、アレか。

「波ぁぁぁ！！！！！」

ズドォォ！！

出た！　あれ、かめはめ波じゃない！

ねこはめ波だ！

まさかのドラゴンボールじゃなくてネコマジンだ！！

「ね、ねこはめ波？」

なのはさんが首を傾げている。

「なのはさんには今度ネコマジンをあげよう」

「え？　う、うん、ありがとう……？」

しかし、ネコマジンか……

まぁ、実際はかめはめ波もねこはめ波もほぼ同一のものだけど。

ネコマジンって悟空の弟子だし。

「レンヤさまー、どうでしたか？」

ブルータスがやって来る。

「うん、凄いな

多分お前の戦闘力は素の状態の俺より上だな」

界王拳使えば俺のが遥かに上になるが。

「えへへ……

あの不思議なおじいさんの所でいっぱい頑張りました！」

不思議なおじいさん……

ああ、最高神（苦笑）の事か。

「他にはなにか出来るか？」

「あとは……空を飛ぶ事と夜目が凄くききます！」

「そうか……
まぁ、気を使った技なんかは俺がおいおい教えてやるよ」
「ありがとうございます！」
ふむ、アレだな、ねこはめ波を使ったって事は……
まさか、分かりにくいけどスーパーネコマジンです　みたいな状態になったりしないだろうな……
確実に俺より強くなるわ。
「すごいよ、ブルータスちゃん！
かっこいいよ！」
「ふにゃ！？」
なのはさんがブルータスの頭をナデナデしてる。
なんかブルータスって凄い頭を撫でてあげたくなるんだよなぁ……
耳がピコピコ動いてて可愛いからか……？
それとも撫でたくなるオーラでも出てるのか……？
どっちみちなのはさんがうらやましい。
「ふ、ふみゃぁ……」

なのはさんに頭を撫でられて気持ちよさそうにしているブルータス。
うん、猫だな。
「にゃぁん……はっ！？」
気持ちよさそうにしていたブルータスが飛びずさる。
「え？　ブルータスちゃん？」
「こ、こんな事してもレンヤさまは渡しませんからね！」
「え、え？　ふぇぇぇ！？
な、何でそんな事……！」
なんか、楽しそうね。
「さて、空気だったユーノくん、最近調子はどうだ？」
「空気って言わないで……
調子はいいよ……
よく猫に追いかけられるけどね」
「そうか、大変だな」
「レンヤもね」

なんだろう、なんか二人で茶を飲みたい気分だなぁ……

ブルータス紹介（前書き）

今日はちょっと次話を書けそうになかったからブルータス紹介を書いて更新することにした

ブルータス紹介

【ブルータス】

性別：♀

毛色：茶

ご存知、煉夜の飼い猫。

元々は野良猫だった。

煉夜とは散歩中に偶然会い、煉夜のニコポを受けてしまい、煉夜を好きになってしまった。

その後、界王拳まで使って逃げた煉夜を的確に追いかけ回し、諦めた煉夜が家に連れて帰り飼い猫となった。

この頃から結構凄い猫だった。

【人状態】

煉夜と一緒にいる事で何故か気を扱えるようになり、それを見た最高神（笑）により、人にもなれる力を得た。

人になると、煉夜と同じ小学3年生くらいの少女になる。

髪は茶髪で猫耳が生えている。
耳を隠す事は可。
人状態だと尻尾が2本になっている。
服は煉夜の母がノリノリで作った様々なモノを着ている。
頭を撫でられるのが好き。
しかし、尻尾を触られると烈火のごとくキレる。
だが煉夜に触られると力が抜ける。
これを見た煉夜はサイヤ人かと戦慄していた。

【気】

人状態だと、戦闘力がだいたい３０前後くらいになる。
素の煉夜より強い。
今の所使える技などは
［ねこはめ波］
［舞空術］
である。

ちなみに、ねこはめ波はかめはめ波と言って撃つことも可能。

他に気を使った技などは煉夜が教えている。

リンカーコアは存在しない。

そのため煉夜と違い無駄なモノがない。

限界を超えたりしたら超化する可能性がある。

以上。

第４話　ギャリック？　いいえスターライトです。（前書き）

最近ギリギリの更新ばかりだ……

いつか、毎日更新に終止符がうたれそうだ……

第４話　ギャリック？　いいえスターライトです。

「行くよ！　スターライト……」

「か、め、は、め……」

「ブレイカァァァァ！！」

「波ぁぁぁ！！」

ズドォォン！！

なのはさんのスターライトブレイカーと俺のかめはめ波が衝突し、拮抗する。

バチ……！バチバチバチ！！

「く……！？」

なのはさんのスターライトブレイカー（以下ＳＬＢ）が俺のかめはめ波を押して行く。

つ、強い……

しかし、俺が地上から撃ち、なのはさんが上空から撃っているから、これ構図的になのはさんが「わ、私のＳＬＢとそっくりなの……！

！」って言う所だよな。

だが、この構図で尚且つ俺が押されてる状態だと、言いたくなるよね。

こう、ね？　こう……

「４倍だ！！」

ズォッ！！

かめはめ波の威力が増しＳＬＢを押し返す。

「ず、ずるい！！

界王拳は反則だよぉー！！」

かめはめ波がＳＬＢをどんどん押していく。

「あ、うぅ……！　も、もうダメ……！！」

バシュン！！

俺のかめはめ波がＳＬＢを押し切り、なのはさんに当たる前に軌道変更してどこかへ飛んでいった。

当たったらヤバいからね、気のコントロールは結構得意です。

……と、いうか何でこんな状況になっているかと言うと。

朝、俺がブルータスと模擬戦してたらたまたま魔法の練習をしているなのはさんを見つけて、ちょっと合流して……こうなった。

俺自身なぜ、かめはめ波とＳＬＢを撃ち合ったのか謎だ。

「凄いです！！　レンヤさま！！」

ブルータスがピョンピョン喜んでる。

今日も元気だな。

「ずるいよ！　界王拳はなしって言ったのに！」

なのはさんが怒っている。

いや、でも

「あそこはああせざるを得なかった」

「……私はベジータじゃないよ……」

な、なのはさんもあの場面を想像していたのか……！？

その後、怒っていたなのはさんを何とかなだめる事に成功し、帰路についた。

ーーーーーーーーーーー［〜夜〜］

ブルータス騒動からなんやかんやで数ヶ月。

結構大変だった。
アリサさんとすずかさんに人状態のブルータスと一緒にいるのを目撃され、問い詰められ、なんだかんだ言って誤魔化すのが大変だった。

最近はもう落ち着いているが。

「レンヤさま〜！
見てください、またママにお洋服を作ってもらいました！」

「そうか、よかったな、似合ってるぞ」

ブルータスは相変わらず元気だ。

母さんも元気だ、いや元気すぎる、ブルータスに自分の事をママと呼ばせてるし。

父さんは……父さん？
俺に父さん何ていたっけ？

……。

……。

……いや、いたよ！

危ねぇ！　忘れる所だった！

父さんがインビジブル過ぎる……！

「あら～？

困ったわ、お醤油が切れちゃってる」

母さんがキッチンで空の醤油を片手に持ち、困っている。

なんかの漫画で見るような光景だな。

「俺が買ってこようか？」

「私も行きます！」

俺の言葉に続き、ブルータスがはい！と、手を上げて言う。

「でも、もう日が暮れてるし……」

「大丈夫だよ、ブルータスもいるしな」

「はい！　レンヤさまは私が守ります！」

女の子に守られる俺、か。

男としてどうなんだろう……？

「そう？　じゃあ、お願いするわ、ルーちゃんも気をつけてね」

「はい！　ママ！」

じゃ、行くか。

ま、何かあったとしても、俺達じゃ、そうそう危険な目にはあわんだろ……

ーーーーーーーーーーー

そんな事を考えていた時期もありました……

「結界……」

「ニャー？」

街中にいきなり結界が現れました。

結構広域だな。

ちなみにブルータスは猫状態で俺の肩に引っ付いてる。

結界が張られたからちょっと猫状態になってもらった。

しかし……

気付いてなかったけど、もうそんな時期だったか……

俺は目線の先にいる赤い少女を見ながらそう考える。

「悪いが、お前の魔力、貰って行くぜ」

ヴォルケンリッターで俺が最初に遭遇したのが、ヴィータさんか…

…！

第5話　鉄槌の騎士（前書き）

危ない！
超ギリギリ！

てか戦闘描写苦手過ぎてヤバい。

第5話　鉄槌の騎士

「波ぁ！！」

ヴィータさんに向けて溜めなしのかめはめ波を放つ。

「なっ！？」

ちょっと驚いたようだが、すぐにかわされた。

さっさと逃げよう！

俺は指を額に当て、気を探る。

……うわぁ……

近くに一つも気がねぇ……！

そうだったよ、ここ結界の中だったな……

「コノヤロ……デバイスもなしにどうやった！」

ヴィータさんがゲートボールのハンマーにちょこっと似てる、グラーフアイゼンを俺に振り下ろす。

ガッ！！

「き、企業秘密だ」

ハンマーを避け、後ろに飛びずさりながらそう言う。
「ふん、まぁなんでもいい、さっさと魔力を……」
《Ｆｌａｍｍｅｓｃｈｌａｇ》
「寄越せ！！」
ズドォン！！
ヴィータさんがハンマーを振り下ろし、それが地面に当たる
「熱っ！」
着撃地点から炎が出ただと……！？
何という爆炎剣。
避けなかったら吹っ飛んでたかも。
「このっ！」
「うおっと」
「ちょこまかと！」
「危なっ」

「動くんじゃねぇ！」

ズガン！！

地面が抉れました。

「これは誰でも避ける」

……物理攻撃に非殺傷はあるんだろうか……

舗装された地面を抉るような攻撃、当たりたくないよな

当たっても俺は多分死なんが。

しかしなぁ、ずっと避け続ける訳にもいかんからなぁ……

こっちも攻撃しようか

「ちょっと色々言いたい事はあるが、今度はこっちから行くぞ！」

そう言い、手の平に気弾を作り出し、留める。

「避けれるなら避けてみろ！」

ヴィータさんに向けて、気弾を投げつける

「こんなもん避けられないわけねぇだろ！」

サッと気弾がかわされ、気弾はどこかに飛んでいく。

「もの凄い簡単に避けられたな……」

「なんか知らねぇが、これで終わりだ！」

ヴィータさんがハンマーを振りかぶり、迫る。

ところがどっこい

「繰気弾だよ！」

ズギュン！！

飛んで行った気弾がUターンしてもの凄い速さでヴィータさんに向かって来る。

「なにっ！？」

《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

ズドン！！

繰気弾はヴィータさんに当たる前に三角形のシールドに阻まれる。

ビキ……！

万が一当たった場合を考えて、そんなに気を圧縮してなかったからシールドにひびをいれて繰気弾は消えた。

「このヤロー……」

どうしようか、ヴィータさんキレてるよな……

「油断大敵だな。
そのついでに言うが、もっと回りを気にしよう」

「にゃあぁぁ！！」

ガシッ

「なっ！？　もう一人いたのか！？」
今まで空気のごとく隙をうかがっていたブルータスが人状態でヴィータさんの背後から飛び付き、羽交い締めにする。

「今ですよ、レンヤさまー！！」

「……え？」

「私が抑えてますからドーンとやっちゃってください！」

この子笑顔で恐ろしい事言ってる！？

羽交い締め……

え、つまり……俺はヴィータさんに魔貫光殺砲をやらなきゃならないのか……？

「離せ！！　クソッ！　全然解けねぇ！！
何だコイツ！？」

ヴィータさんがジタバタともがいている、ブルータスは力強いからね。

「あー、えっと、気絶程度でなんとか……」

右手に気を集め、気弾を作り、ヴィータさんへと

キラッ☆

「！！　うわっ！」

ズドン！！

放とうとした瞬間に空から何かが降ってきた。

「魔力弾か……！！」

慌てて、ブルータスの方を見ると

「ハッ！！」

「にゃっ！」

青い狼がブルータスに突進し、ヴィータさんを助けていた。

突進を飛び退いてかわしたブルータスはクルクルと軽い身のこなしで着地し、狼を睨む。

しかし、ブルータスの睨みは可愛かった。

いや、そうじゃなくて、あの狼、確実にザフィーラさんだよな……

ザフィーラさんも結界内にいたのか？

俺自身回りを気にかけるべきだった。

「退くぞ！　ヴィータ！」

「ち、ちくしょう……！

お前ら覚えてろよ！！」

ザフィーラさんも加勢して戦いになるかと思ったけど、退いてくれたようだな……

「レンヤさまー、追いかけないんですか？」

ブルータスがヴィータさん達が去った方へ指をさしながら言う。

「うん、追わないでおこう。

今はとりあえず醤油を買って帰るぞ」

腹減ったしな。

明日にでもなのはさんに話さないとな……

第６話　魔力放出（前書き）

なんだろう、Ａ'ｓ編がのんびり進行していく……

ペース上げるか……？

第6話　魔力放出

「昨日変な魔導師とラディッツしてた、主にブルータスが」

「変な魔導師って？　あとラディッツってどういう事なの……？」

只今翠屋に来てます。

昨日のヴィータさん達の事を話そうと、翠屋に来ました。

正直、翠屋には来たくなかった……

だってさ、士郎さんがチラチラこっち見てるんだもの！！

しかし、ブルータスがケーキとか食べてみたいって言ったから仕方なく来た。

「ママ！　これ美味しいですよ！」

「ふふ、本当ね～」

何故か母さんもついて来た。

何故だ。

最近出番多いな、おい。

「ブルータスちゃん、楽しそうだね」

「うん、ってそれはまぁ、置いといて。

魔導師の事だけど、順を追って話すと……」

昨日の事を思い出す。
「夜に、俺とブルータスで切れた醤油を買いに街にいったら、結界が突然張られて、赤い少女に魔力寄越せって襲われたんだよ」
「襲われたの！？」
なのはさんが驚いている。
「で、取り敢えず逃げようとしたけど無理だったから、応戦した。俺にしては珍しく界王拳を使わずに善戦（？）したよ」
今更だが俺ってドラゴンボールだと、ある程度戦って出す必殺技級の攻撃を最初からバンバン使ってるよな……
「怪我とかしてない？」
「全然。
むしろ、相手の方が怪我しそうな勢いだった」
あのままザフィーラさんが来かったらな。
「そっか、でも、その子は何で魔力を……？」
頭に？を浮かべるなのはさん。
「きっと、色んな人から魔力を集めて元気玉を……」
「絶対違うと思う」

もの凄いズバッと言い切られた……

「ま、まぁ、とにかく、なのはさんも気をつけて、なのはさんの魔力はかなり大きいから襲われる可能性がある」

魔力で思ったが、俺って現時点じゃ、なのはさんやフェイトさんより魔力多いんだよなぁ……

無駄なくせに無駄に多い無駄魔力か……

「うん、ありがとう
レンヤくんも気をつけてね」

その後、昨日みた限りのヴィータさんの戦い方とかを教えて、退散した。

ずっとなのはさんと話してたから士郎さんの俺を見る目が怖くなって来てたし……

取り敢えずケーキに夢中のブルータスと桃子さんとのほほんと会話してる母さんは置いて来た。

ーーーーーーーーーーー

翠屋から出て、山の中に入る。

よし、ちょっと、魔力を放出してみようか。

ヴィータさん以外の誰かが魔力にひかれてやってくるかも。

俺がヴォルケンホイホイになってる気がするがあまり考えないでおこう……

「さて」

魔力放出だが……

魔力ってどう放出すればいいの？

……。

……。

……。

え～と……

魔力を感じる事は出来るんだから、なんとか……

気を放出する感じで……

「はぁっ！！」

バシュウウウ！！

シュインシュインシュインシュイン……

……

気だわコレ。

ドラゴンボールでよくある体のまわりに透明の炎っぽい気があがっている。

一回、放出止めて……

うーん……

よし……もう一回

――――――――――［～数十分後～］

orz

……あれ～？

魔力ってどうやって出せばいいんだ？

気は呼吸するかのごとく出せるのに……

気を使うのに慣れきって、魔力が使えないの巻。

いや、俺にとっちゃ別になんの問題もないけど。

仕方ない、魔力放出は諦めて、またヴィータさんか誰かが現れるのを待つ事にする。

あと、今度、なのはさんにでも、どうやって魔力を引き出してるか聞いてみよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0830y/

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

2011年11月19日22時40分発行